

栗生遺跡発掘調査報告書

—県道有田・高野線道路改良工事に伴う発掘調査—

1990年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

栗生遺跡発掘調査報告書

—県道有田・高野線道路改良工事に伴う発掘調査—

1990年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

有田郡清水町は豊かな緑に恵まれた景勝・保養の地として、また、数多くの民俗行事が伝承されていることでも知られています。

この度、県道有田・高野線道路改良工事に伴い、同町栗生に所在します栗生遺跡の発掘調査を実施いたしました。当遺跡の所在する有田川流域は、縄紋時代にまでさかのぼる遺跡が数多く発見されており、早くから人々の営みが盛んであったことを窺わせる地域であります。この栗生遺跡も昭和28年の水害の際に土器などが発見されたことにより、縄紋時代の遺跡として認識されるに至りました。調査の結果、この遺跡が縄紋時代の前期にまでさかのぼり得ることや、中世及び近世の遺構・遺物を数多く検出するなど、多大の成果を収めることができました。

発掘調査は昭和60年度から63年度までの4か年を要し、昭和60・61年度を社団法人和歌山県文化財研究会が、昭和62・63年度を財団法人和歌山県文化財センターがそれぞれ実施いたしました。当センターでは、調査終了後概要報告書を作成し資料の公開に努めてまいりましたが、この度、平成元年度事業として改めて調査資料の整理を行いました。

ここに、その成果をとりまとめ報告書を刊行いたします。本書が県民の皆様方の調査研究の一助ともなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成に際し、種々御指導・御協力いただいた関係各位ならびに地元住民の皆様に厚く御礼を申し上げるとともに、今後もより一層の御支援を賜りますようお願いいたします。

平成2年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮 谷 志 良

例 言

1. 本書は、有田郡清水町に所在する粟生遺跡^{あお}の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県道有田・高野線道路改良工事に伴う事前調査として昭和60年度から63年度までの四か年、出土遺物整理は平成元年度にそれぞれ実施した。
3. 調査及び出土遺物の整理は、和歌山県の委託を受け、県教育委員会の指導の下に、昭和60・61年度（第一・二次）の調査を社団法人和歌山県文化財研究会が、昭和62・63年度（第三・四次）の調査と出土遺物整理を財団法人和歌山県文化財センターが各々実施した。
4. 調査組織及び各年度の担当者は以下のとおりである。

調査委員 舘磨 正信 和歌山県文化財保護審議会委員

〃	巽 三郎	〃
〃	都出比呂志	〃
〃	藤澤 一夫	〃

社団法人 和歌山県文化財研究会

事務局 長 垣内 茂

事務局次長 北野 全美 県文化財課主幹 (昭和60年度)

〃 宮崎 喜一 〃 〃 (昭和61年度)

〃 桃野 真晃 〃 課長補佐 (〃)

幹 事 吉田 宣夫 〃 文化財第2係長 (〃)

財団法人 和歌山県文化財センター

専務理事 鍋島伊津夫 (平成元年度)

事務局 長 梅村 善行 (昭和62・63年度)

〃 専務理事兼務 (平成元年度)

事務局次長 菅原 正明

埋蔵文化財課長 辻林 浩

管理課 長 松田 正昭

昭和60年度（第一次調査） 永光 寛（社団法人和歌山県文化財研究会 主任技術員）

昭和61年度（第二次調査） 山本 高照（社団法人和歌山県文化財研究会 技術員）

井石 好裕（社団法人和歌山県文化財研究会 技術員）

昭和62年度（第三次調査） 山本 高照（社団法人和歌山県文化財センター 埋蔵文化財課主査）

井石 好裕（社団法人和歌山県文化財センター 埋蔵文化財課技師）

昭和63年度（第四次調査） 山本 高照

平成元年度（出土遺物整理） 井石 好裕

5. 本書は、第一次調査から第四次調査の調査成果を収録したものである。記述した内容が、既刊の概要報告書2冊と異なる場合は、本書をもって正報告とする。
6. 本書は、各年度調査担当者の協議のうえ、井石好裕が編集した。
本文の執筆分担は目次に示すとおりである。
7. 調査及び報告書作成にあたっては、県文化財課・社団法人和歌山県文化財研究会・紀伊風土記の丘管理事務所・財団法人和歌山県文化財センター諸氏の助言・協力と、奈良大学 泉拓良氏の指導・助言を得た。
8. 出土金属製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

凡 例

1. 本書で使用した遺構の記号は以下のとおりである。
掘立柱建物—S B、溝—S D、土坑—S K、土壙墓・その他—S X、ピット—P
2. 地区名及び遺構番号は本書作成に際し、新たに整理し直し、通し番号とした。
3. 地区名は、現状の畦畔等を利用し、便宜的に設定したものである。各年度の調査区はそれぞれ、第一次—D区、第三次—A～C・E～H区、第四次—I～M区に相当する。
4. 遺構実測図に示した方位はすべて磁北を表わす。
5. 遺物には、頭に以下の記号を付し、遺物番号は各々の内での通し番号とした。
石器—S、縄紋土器—J、中・近世の遺物—C
6. 遺物番号は、実測図と写真図版において一致するが、一部写真図版のみのものや、番号を付していないものもある。

目 次

第Ⅰ章	位置と環境	井石 好裕	1
第Ⅱ章	調査の経緯と経過	山本 高照	2
第Ⅲ章	遺 構		7
第1節	A～C区検出の遺構	井石 好裕	7
第2節	D区検出の遺構	〃	13
第3節	E区検出の遺構	〃	13
第4節	F～H区検出の遺構	〃	14
第5節	I～M区検出の遺構	山本 高照	16
第Ⅳ章	遺 物	井石 好裕	21
第1節	石 器		21
第2節	縄 紋 土 器		24
第3節	中・近世ほか		26
1.	A～H区出土遺物		26
2.	I～M区出土遺物		27
第Ⅴ章	ま と め	井石 好裕	29

図 版 目 次

P L. 1	1	遺跡遠景	P L. 10	1	S E01 S K47
	2	遺跡全景		2	S E01
P L. 2	1	A～C区全景		3	S K48
	2	C区全景	P L. 11	1	S X05
P L. 3	1	S D01		2	同・遺物出土状況
	2	同・土層		3	S X06
	3	S K04・05	P L. 12	1	S K24
P L. 4	1	B区縄紋時代の遺構		2	S K40
	2	集石 1		3	S K33
	3	E区全景		4	S K42・41
P L. 5	1	F～H区全景		5	S K38
	2	F～H区南半検出遺構		6	S K46
P L. 6	1	S K15		7	S K43
	2	S X01		8	S K44
	3	S K20	P L. 13		石器 1
	4	S K19	P L. 14		石器 2
P L. 7	1	S B01	P L. 15		石器 3
	2	S B04	P L. 16		石器 4
	3	S B05	P L. 17		縄紋土器 1
	4	S K18	P L. 18		縄紋土器 2
	5	S K21	P L. 19		縄紋土器 3
	6	S B03	P L. 20		中・近世の遺物 1
P L. 8	1	I区全景	P L. 21		中・近世の遺物 2
	2	J区全景	P L. 22		中・近世の遺物 3
	3	K区全景	P L. 23		中・近世の遺物 4
P L. 9	1	K区全景	P L. 24		中・近世の遺物 5
	2	L区全景	P L. 25		中・近世の遺物 6
	3	M区全景			

挿 図 目 次

第1図	粟生遺跡位置図……………	1	第16図	弥生土器実測図……………	27
第2図	第1次調査風景……………	2	第17図	石器実測図1……………	31
第3図	A～C区調査前の状況……………	2	第18図	石器実測図2……………	32
第4図	粟生遺跡と周辺の遺跡……………	3～4	第19図	石器実測図3……………	33
第5図	粟生遺跡周辺の地形……………	3～4	第20図	石器実測図4……………	34
第6図	調査区及び各地区の土層……………	5～6	第21図	縄紋土器実測図1……………	35
第7図	A～C区遺構実測図……………	8	第22図	縄紋土器実測図2……………	36
第8図	A～D区遺構平面図……………	9～10	第23図	縄紋土器実測図3……………	37
第9図	E～H区遺構平面図……………	11～12	第24図	中・近世遺物実測図1……………	38
第10図	D区Tr. 1 北壁面土層図……………	13	第25図	中・近世遺物実測図2……………	39
第11図	D区Tr. 2（北から）……………	13	第26図	中・近世遺物実測図3……………	40
第12図	F～H区遺構実測図……………	15	第27図	中・近世遺物実測図4……………	41
第13図	I～M区遺構実測図……………	17	第28図	中・近世遺物実測図5……………	42
第14図	I～M区遺構平面図……………	19～20	第29図	銭貨拓影図……………	42
第15図	弥生土器……………	27			

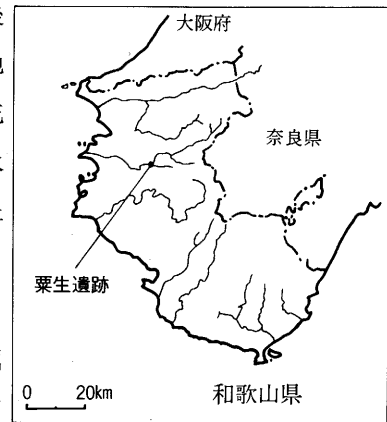
表 目 次

表1	遺跡地名表……………	3～4	表5	石鏃 尖端角度分布……………	22
表2	出土石器の組成……………	21	表6	石鏃 類別点数……………	22
表3	石鏃 長さとの比率1……………	22	表7	石鏃 類別重量平均値……………	22
表4	石鏃 長さとの比率2……………	22	表8	石鏃 重量分布……………	22

第Ⅰ章 位置と環境 (第1・4・5図、表1、PL. 1)

粟生遺跡の所在する有田郡清水町は、その四周を700～1000m前後の高峰に囲まれ、その町域の8割以上を山地が占める。この山間地を西流する有田川は、高野山をその源とし、曲折しながら伊都郡花園村、有田郡清水町、金屋町、吉備町を経て、有田市に至り紀伊水道へと注ぐ。遺跡はこの有田川の右岸に形成された舌状の河岸段丘上に位置し、河口域からの直線距離は約20kmである。

遺跡周辺の現在の地表面は、標高113～116m前後あり、有田川との比高差は約8～11mを計測する。有田川は当段丘付近で大きく屈曲し、攻撃面にあたる西側では岩盤の露出する急峻な崖面となっている。他方、遺跡の東方には、比較的ゆるやかな傾斜をもつ丘陵地があり、現在の集落はこの丘陵の縁辺部に形成されている。



第1図 粟生遺跡位置図

粟生遺跡は、1953年の7.18水害で縄文時代の遺物が発見されたことにより、遺跡として周知されるに至ったものである。現在のところ、有田川流域の旧石器時代に属する遺跡は、下流域である吉備町内の、藤並地区遺跡をはじめとする数遺跡に限られており、中・上流域での存在は確認されていない。一方、縄文時代の遺跡は流域全体に広くその分布が認められるが、その多くは粟生遺跡同様に、水害等の偶然の契機により遺構や遺物が発見された例が多く、内容については不明確なものも少なくない。

縄文時代の遺跡を上流域から順に述べると、中期から晩期に至る土器群や宮滝式の注口土器が完形で出土する西原遺跡、後期の葛籠遺跡、晩期の清水遺跡、中期の集落遺跡である岩野河遺跡、土製の耳栓3点や後期の土器が多量に発見され大規模な集落遺跡と考えられる糸野遺跡、中期初頭の神戸遺跡がある。また、有田川の沖合に浮かぶ地ノ島からは、中期初頭の鷹島式土器をはじめ、後期から晩期にかけての土器が多量に出土し、藤並地区遺跡からは草創期あるいは早期の土器が、野田地区遺跡でも中期の土器片と石棒が出土している。その他、金屋町内からは石鏃・石錐の他、石棒・異形部分磨製石器などが単独で出土し、吉備町の奥^{おき}II遺跡・土生池^{はぶいけ}遺跡・藤並地区遺跡からは草創期あるいは早期に属する有舌尖頭器等も発見されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、下流域に集中し、中・上流域では僅かに宝谷遺跡が知られるのみである。宝谷遺跡は有田川支流沿いの山の斜面に位置し、弥生時代後期の土器の他、石皿・凹石等が発見され、柱穴状の遺構も確認されている。

その他、清水町内には、鎌倉時代の経塚遺跡で、宝篋印塔の基壇内に常滑焼の経壺を埋納し、経巻・和鏡を納めた東大谷経塚遺跡、1966年に発掘調査が行われ、礎石・経塚等が確認された日光神社遺跡、阿瀬川城跡をはじめとする南北朝時代から近世にかけての城跡などが点在する。また、粟生遺跡の近辺には、平安時代に創建されたと伝えられる吉祥寺、応永34年(1427) 銘の棟札を持ち、国の重要文化財に指定される粟生薬師堂がある。

第II章 調査の経緯と経過（第2・3・6図）

清水町粟生地内において、和歌山県土木部が県道有田・高野線道路改良工事を計画した。この工事は、有田川の上流と下流を結ぶ幹線道路である県道有田・高野線が交通量の増加に伴い手狭となったため、拡幅・整備することを目的とするものであるが、粟生地内の一部は現有道路の両側に民家が迫り拡幅の余地がないため、バイパスを設けることとなった。ところが、バイパス予定地には1953年の大水害時に発見された縄文時代の粟生遺跡が存在することから、土木部と県教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、県教育委員会では、まず遺跡の範囲を確認する調査を行い、その後、本格的な発掘調査を実施することにした。

第1次調査 1985年8月1日から9月30日まで、D区に確認調査坑を2ヵ所設定して実施した。その結果、中世の遺物包含層を確認したが、遺構は見つからなかった（第2図）。

第2次調査 A区の北方およそ100mの地点からH区にかけて12の確認調査坑を設けて行い、A区から南で、縄文時代と中・近世の遺構・遺物を確認した。調査期間は1986年7月28日から12月20日までである。

第3次調査 第1・2次調査の結果を受けて、1987年5月25日から1988年3月26日まで、A～C・E～H区およそ1,500㎡の発掘調査を実施し、併せてI区からM区の南方約120mの地点までを対象に確認調査を行った（第3図）。

第4次調査 前年度の確認調査で遺構・遺物が検出されたI～M区およそ1,300㎡を対象に実施した。調査期間は1988年6月13日から1989年3月30日までである。

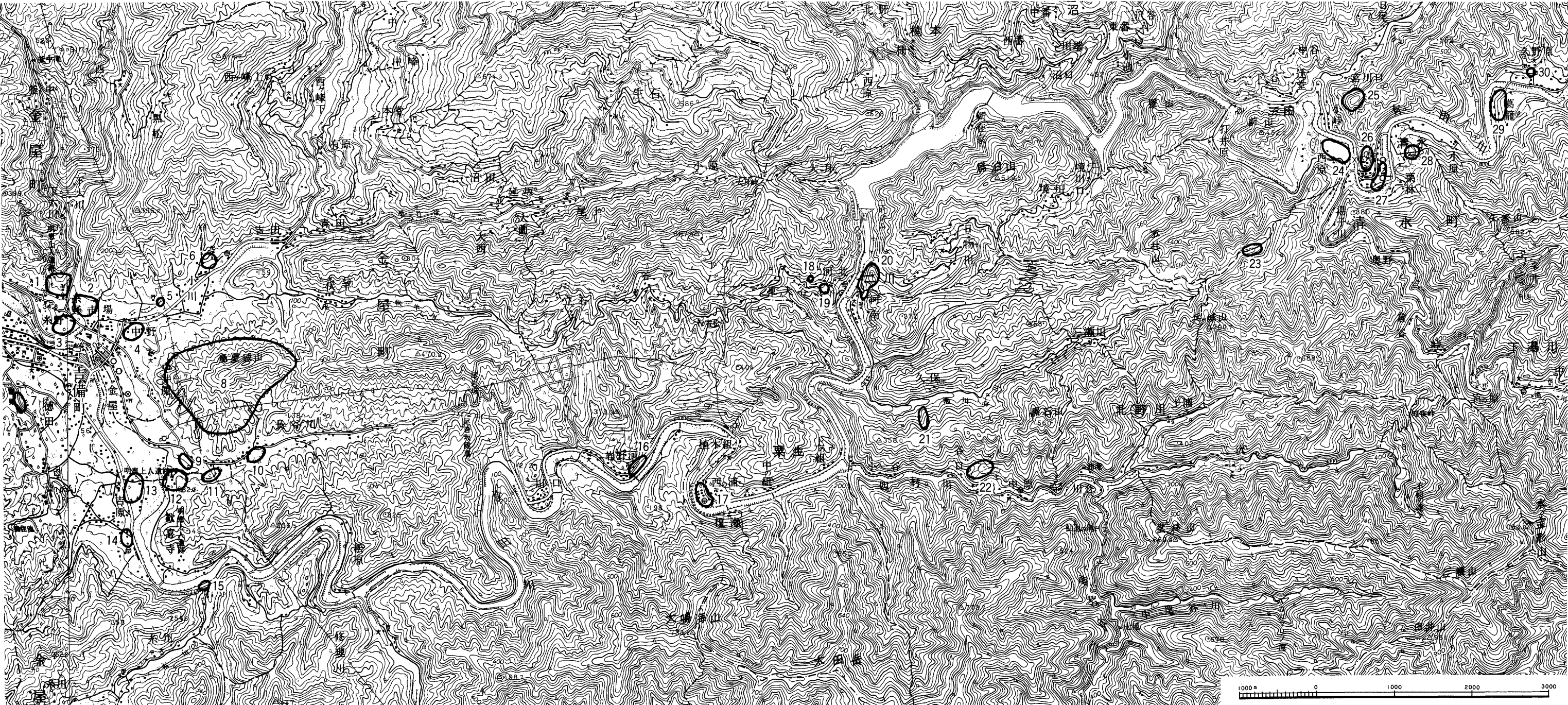
なお、調査は、県教育委員会の指導のもとに、第1・2次調査は社団法人和歌山県文化財研究会が行い、第3・4次調査は財団法人和歌山県文化財センターが実施した。



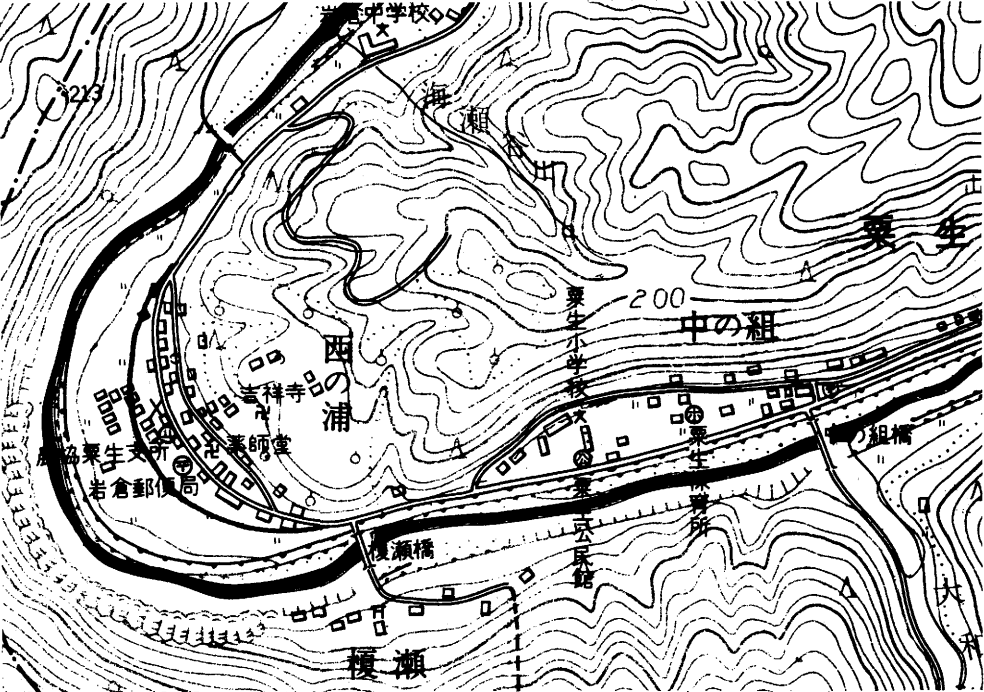
第2図 第1次調査風景



第3図 A～C区調査前の状況



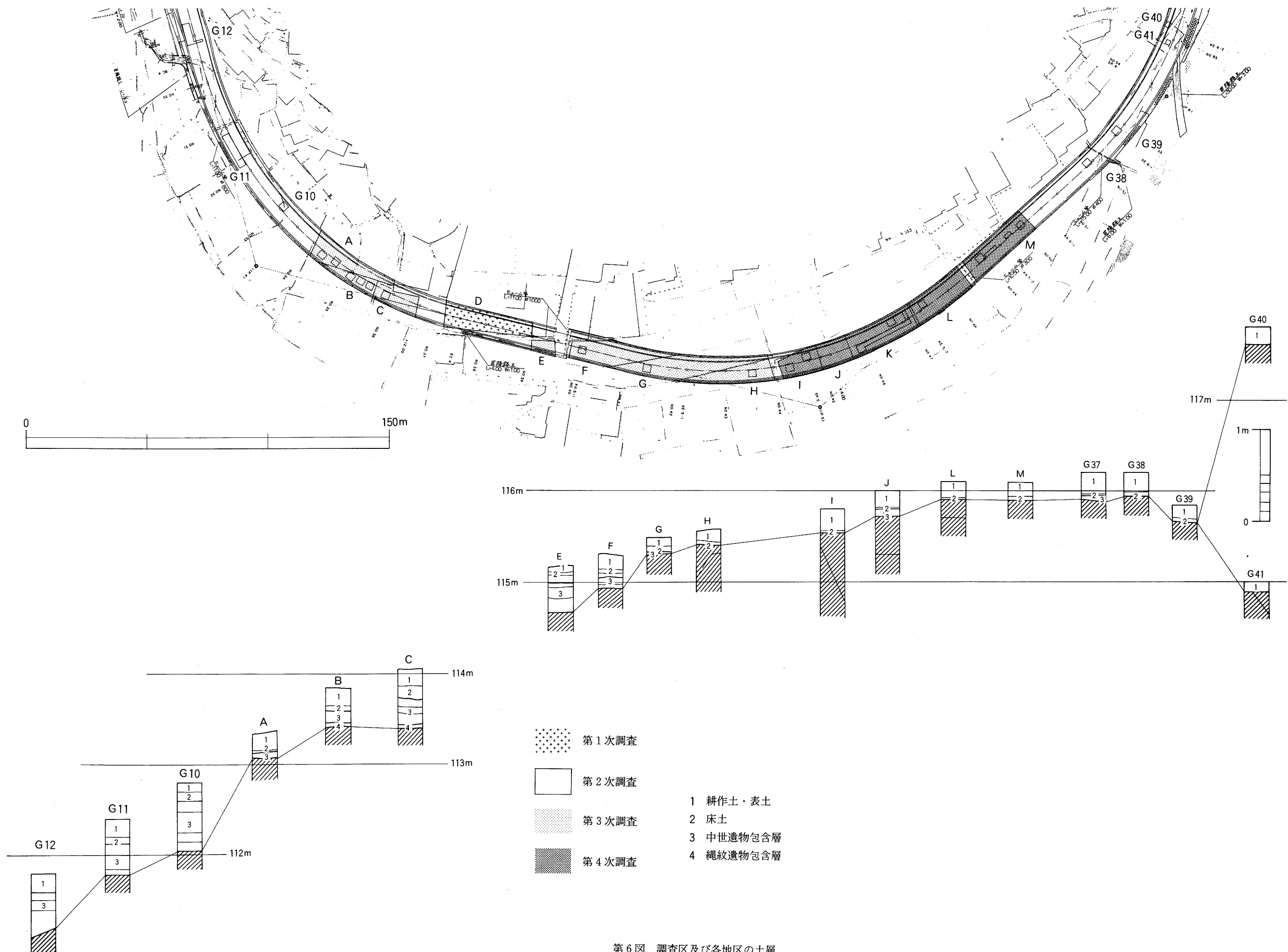
第 4 図 粟生遺跡と周辺の遺跡



第 5 図 粟生遺跡周辺の地形

番号	遺 跡 名	種 類	時 代	立 地	摘 要	番号	遺 跡 名	種 類	時 代	立 地	摘 要
1	旧 成 道 寺 跡	寺院跡	鎌倉	山麓		16	岩 野 河 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	縄紋土器
2	市 場 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石器	17	粟 生 遺 跡	散布地	縄紋、中世～近世	河岸段丘	サヌカイト、石鏃、石斧、縄紋土器(中・後期)、瓦器、近世陶磁器
3	糸 野 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石鏃、石斧、土製耳飾	18	東 大 谷 経 塚	経 塚	中世	山腹	和鏡
4	中 井 原 遺 跡	散布地	縄紋	山麓	石器	19	城 空 山 城 跡	城 跡	中世	山頂	馬場
5	白岩丹生神社遺跡	散布地	室町	山麓	瓦器	20	阿瀬川氏大城跡	城 跡	中世	山頂	空濠、本丸、二の丸
6	小 川 遺 跡	散布地	縄紋	山麓	石器	21	宝 谷 遺 跡	散布地	弥生	山腹	弥生土器、凹石、石皿など
7	鷹 巣 池 遺 跡	散布地	先土器～縄紋	台地	サヌカイト片	22	阿瀬川氏天城跡	城 跡	中世	山腹	
8	鳥 屋 城 跡	城 跡	中世	山頂	小刀、瓦器、銅仏	23	七 肘 遺 跡	古戦場	中世	山頂	刀、鏢
9	下 歓 喜 寺 遺 跡	散布地	縄紋	山麓	石器	24	西 原 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石鏃、縄紋土器(後期)
10	岡 の 前 遺 跡	散布地	縄紋	谷平野	石器	25	城 の 天 城 跡	城 跡	中世	山腹	曲輪
11	馬 の 谷 遺 跡	散布地	縄紋	谷平野	石器	26	清 水 城 跡	城 跡	安土桃山	丘陵端	空濠、礎石建物多数
12	歓 喜 寺 跡	寺院跡	鎌倉	河岸段丘	瓦	27	清 水 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石鏃、縄紋土器(晩期)
13	村 里 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石鏃、石槍、須恵器、土師器、瓦器	28	阿瀬川古城跡	城 跡	中世	丘陵端	空濠、礎石
14	神 戸 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石器、縄紋土器	29	葛 籠 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	縄紋土器(後期)
15	糸 川 遺 跡	散布地	縄紋	河岸段丘	石鏃	30	保 田 氏 邸 跡	屋敷跡	安土桃山	山麓	石垣

表 1 遺跡地名表



第 6 図 調査区及び各地区の土層

第Ⅲ章 遺 構

第1節 A～C区検出の遺構（第7・8図、PL2～4-2）

A～C区は今回調査を行った中で最も北に位置し、試掘調査の結果、縄紋時代の遺物包含層と遺構が確認されていた地点である。周辺の地形はC区からA区に向けて下降し、現地表面での比高差は約70cmを測る。縄紋時代の遺物包含層は、黄茶褐色砂質土（4a層）と明黄色弱粘質土（4b層）の2層あり、4a層はA区の一部とB・C区に、4b層はB・C区にのみ堆積が認められる。遺構検出はB・C区の一部で4a層を除去した段階で試みた他は、全て地山面で行った。地山面の標高はA区が約113.1m、B・C区が113.4mである。

検出した遺構には、溝・土坑・ピット等がある。地区によりその密度にばらつきがあり、A区とC区の一部は、付近が可耕地化される際に削平を受けたものと考えられる。

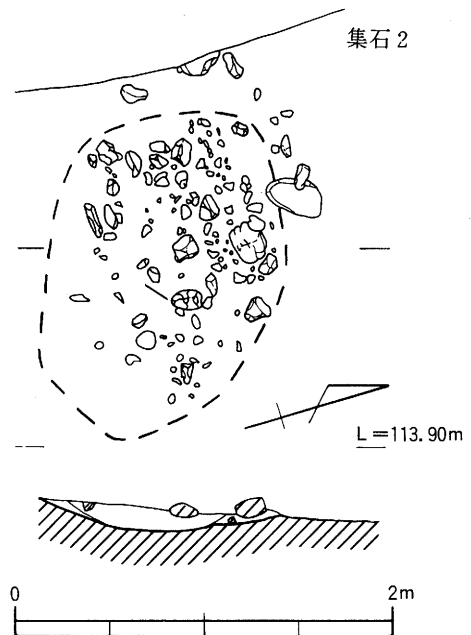
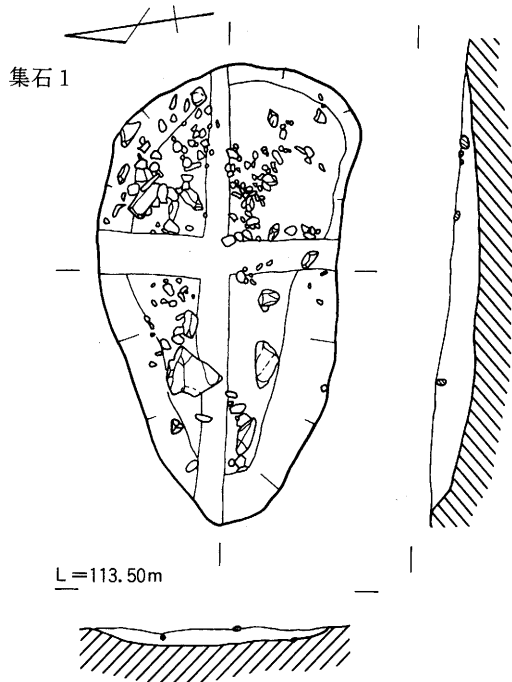
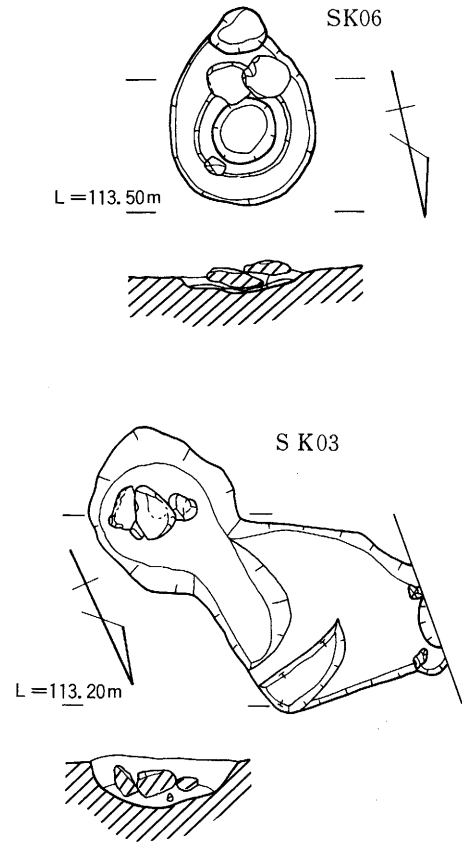
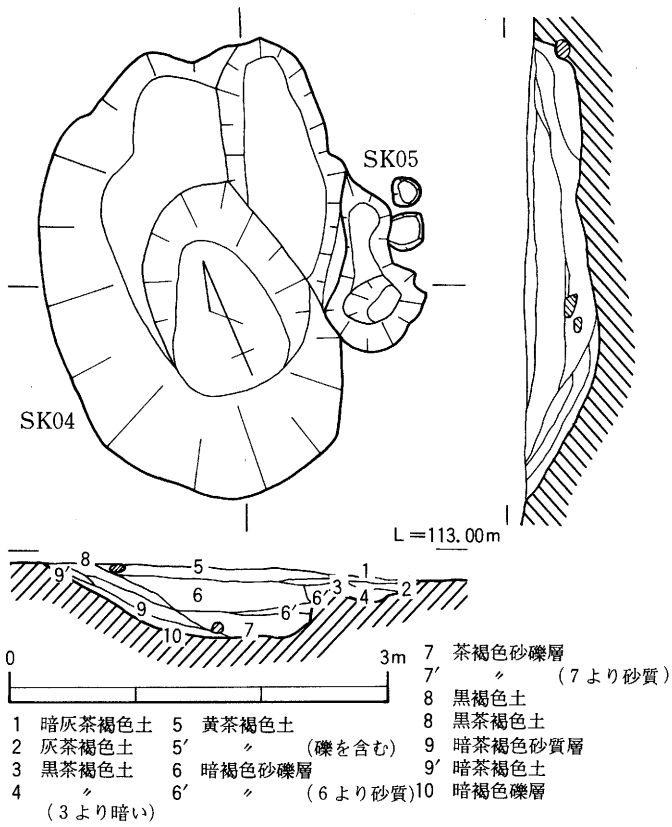
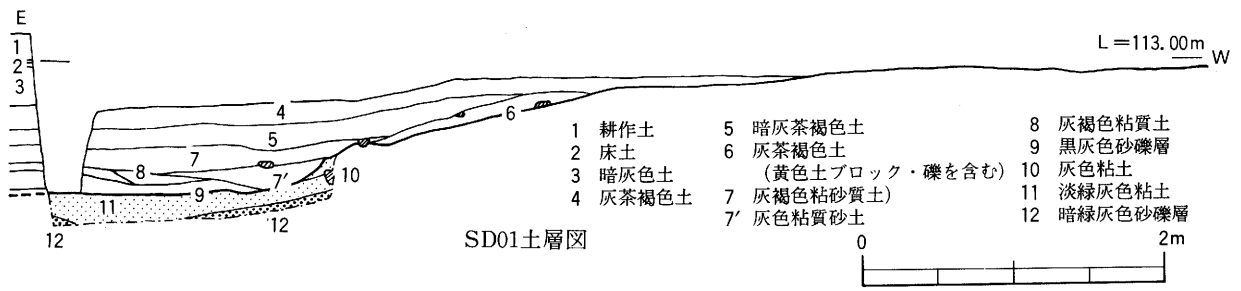
SD01 A区北東部で検出した幅8.6m以上の規模をもつ溝状遺構である。方向を南東から北西にとり、断面は2段掘り状の形態を呈している。埋土は大別すると3層である。溝中央部の1段低くなる部分には、粘質土と砂礫層が堆積していた。恐らくは周辺の地形に沿って掘削されたものと考えられる。出土遺物には瓦器碗をはじめとする中世の土器類の他、石器、縄紋土器などがあるものの、土器はいずれも細片のため、図化できるものは少ない。

SK04・05 共にA区北西で検出された土坑である。SK04は2.5m×3.5m、深さ0.6mを測る。楕円形に近いプランを呈し、北側及び東側ではほぼ垂直に掘られるが、南・西では比較的ゆるやかに立ち上がる。埋土中には礫が多く含まれており、底面は南側部分が1段落ち込んでいる。SK05は04を切り込んで掘削されている不定形な土坑である。深さは検出面から0.2mを測る。SK04からはJ6・40・45・52・83・95・116など比較的多くの縄紋土器が出土している。

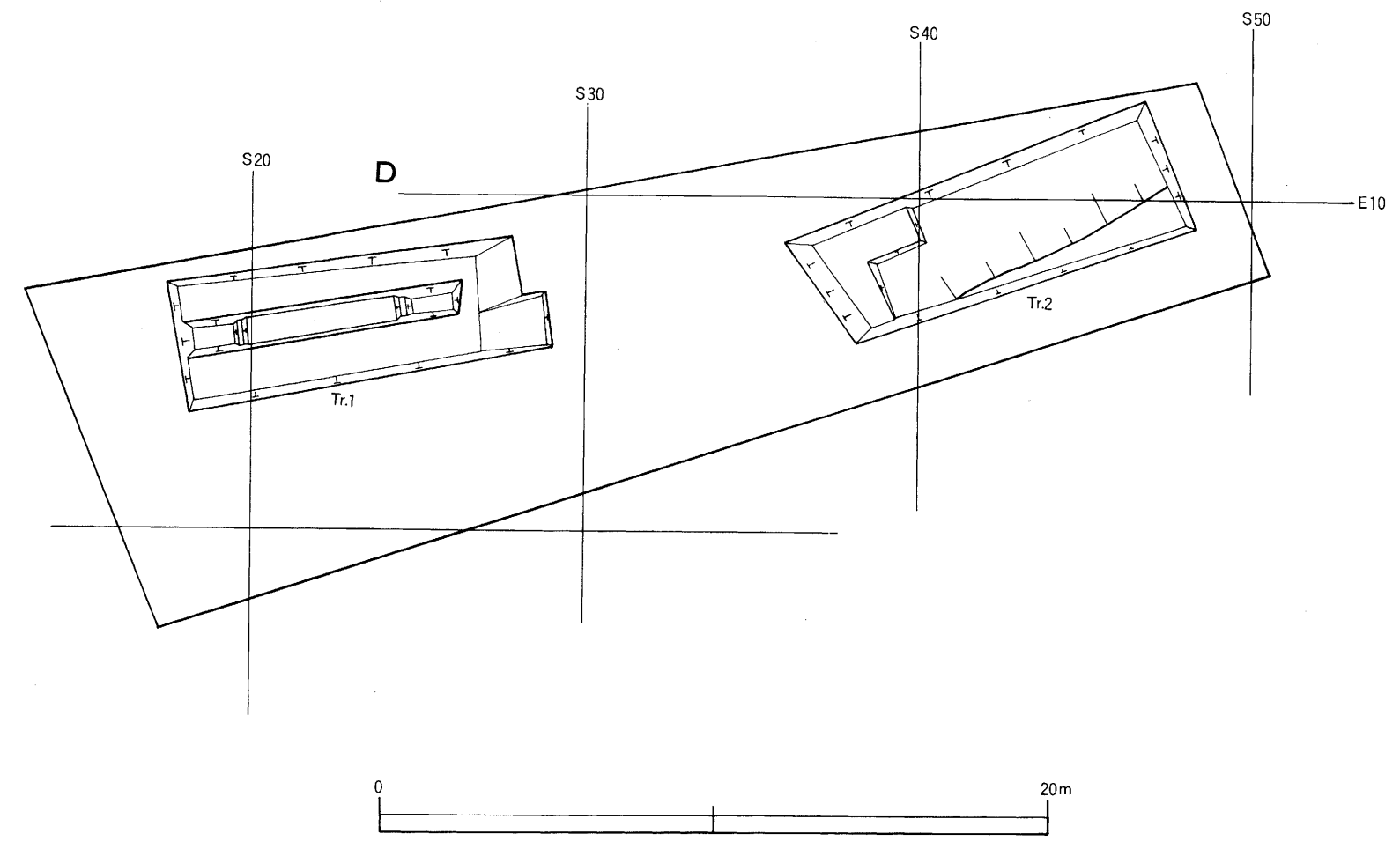
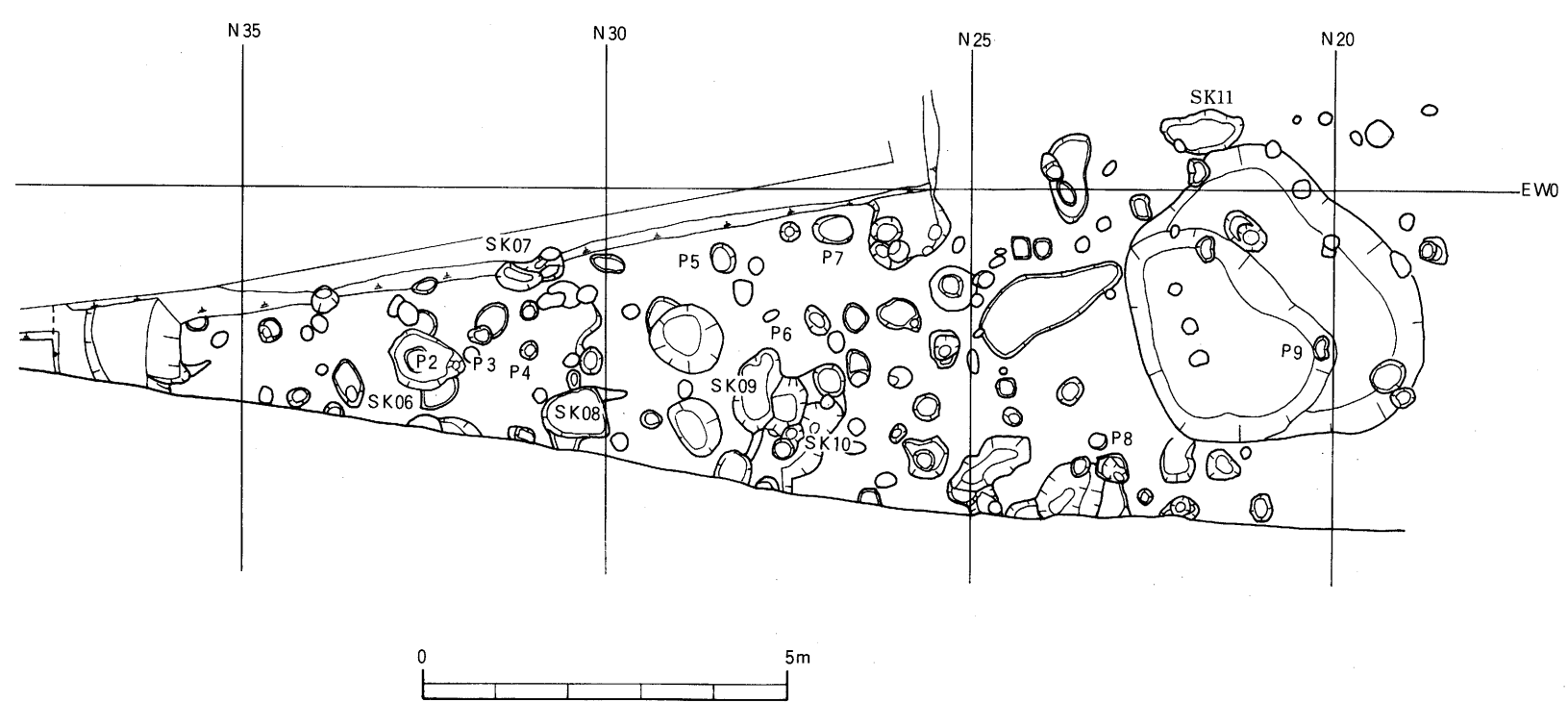
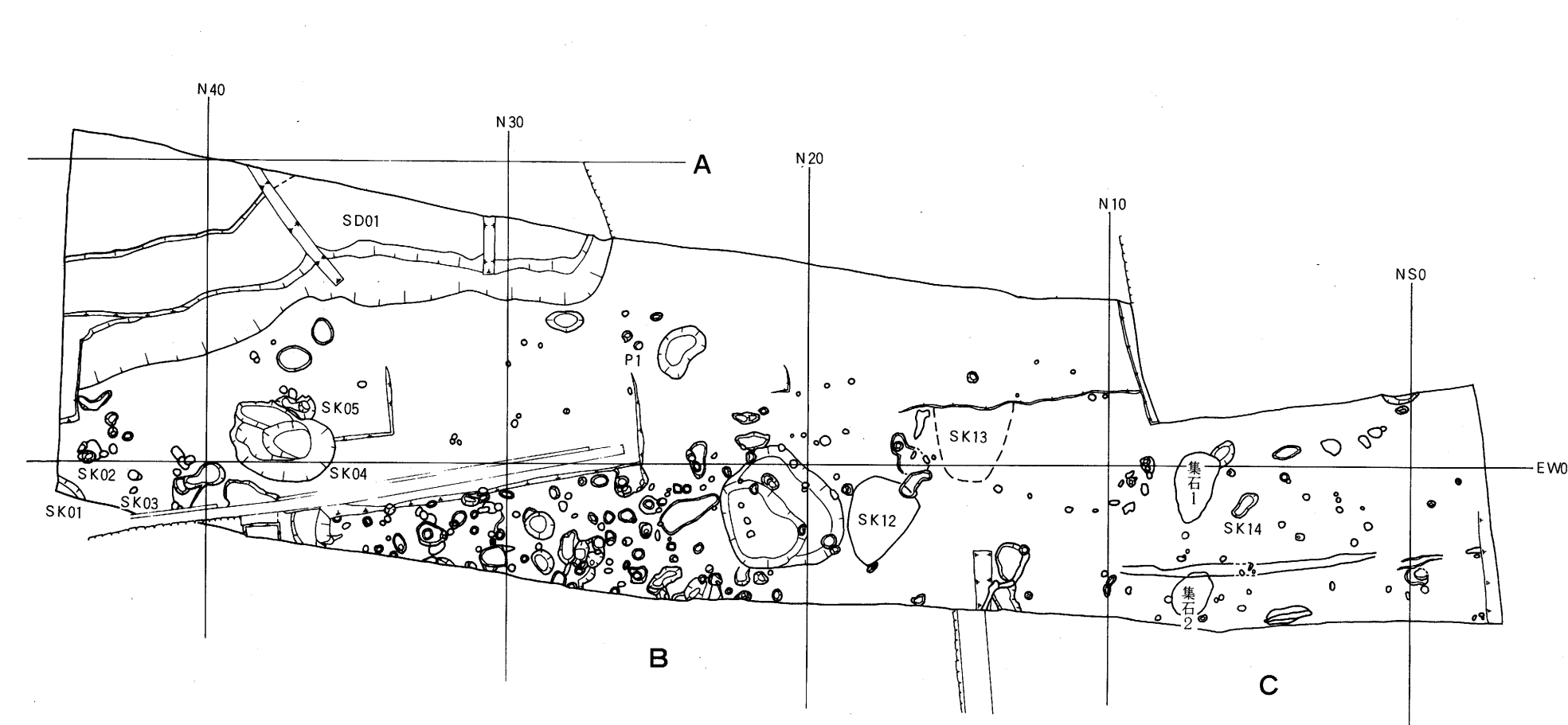
SK03 A区で検出した不整形な土坑である。2つ以上の土坑が重複していると考えられるが、前後関係等は明らかに出来なかった。南東部が最も深く、1辺約0.8m前後のやや丸みを帯びた方形ないしは五角形のプランを呈する。土坑内には15～30cm大の河原石が数個認められるが、いずれも底面には接していない。遺物は少量の縄紋土器片が出土している。

SK06 B区で検出された直径0.8m前後の円形に近い土坑である。深さは0.15m遺存しており、底面には長さ25cm・厚さ10cm程の偏平な河原石2枚が置かれている。出土遺物はいずれも細片であるが、縄紋時代のものと判断される。

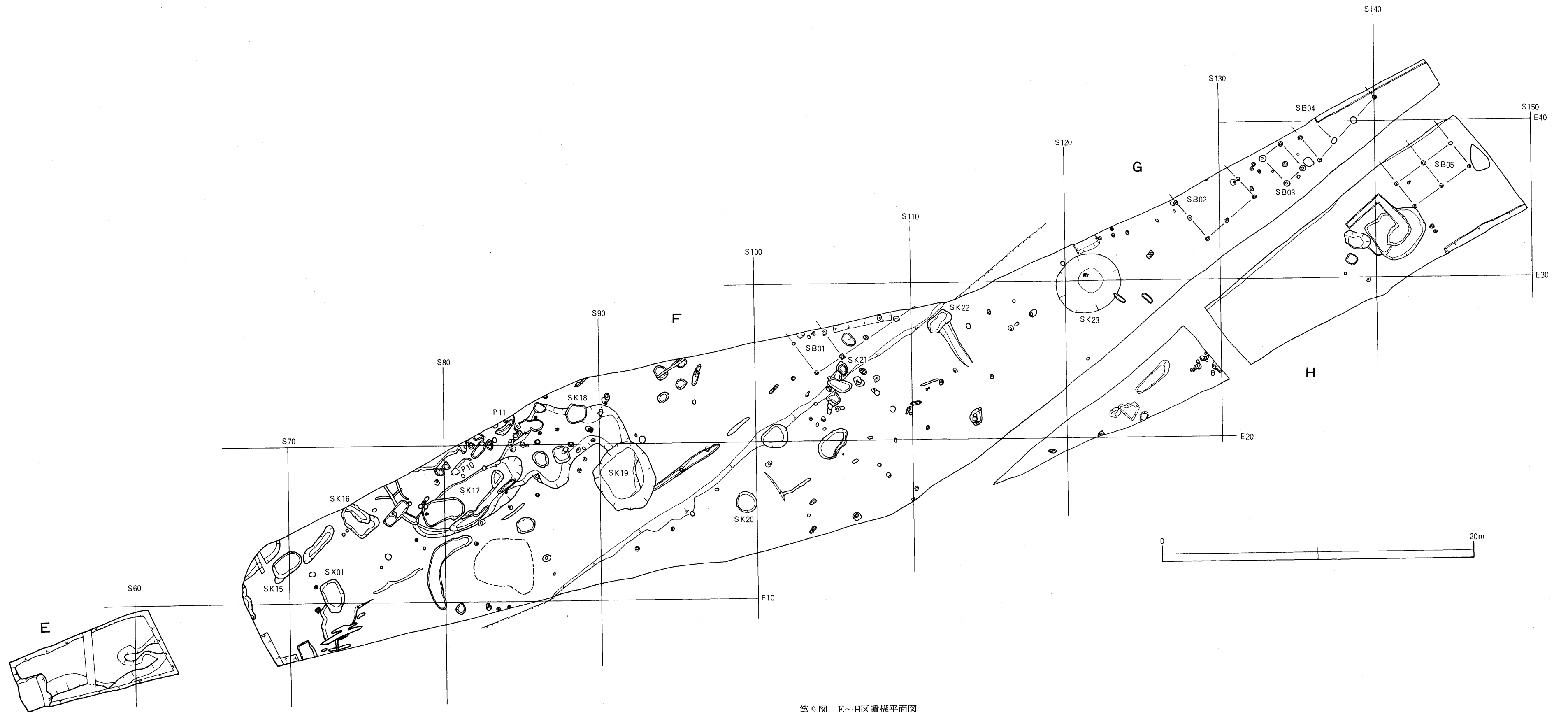
B区検出のピット B区において大小100あまりのピットを検出している。規模は直径10～50cm、深さ5～40cmを測り、断面の形態は垂直に掘り下げるもの、袋状のものなど様々である。多くは中世の遺物を含む3層と縄紋時代の包含層4a層を埋土としている。前述のように4a層を除去した後、遺構の検出を試みたが、プランが不明確なため地山面まで掘り下げ再度検出を行った。試掘調査の所見及び調査区西壁面における土層観察の結果、これらの遺構が少くとも2時期にわたることは確実であるが、各々の所属時期については明らかに出来なかった。ピットの多くは住居に伴う柱穴と考えられる。その規模・



第7図 A~C区遺構実測図



第8图 A~D区遺構平面図



第9図 E~H区遺構平面図

埋土等からいくつかのまとまりは認められるが、明確に住居址としての構成を明らかにするには至っていない。なお、4 a 層中には炭をブロック状に含む部分があるものの、炉やそれに類似する施設は検出していない。

集石 1・2 共に C 区において 4 a 層を掘り下げた段階で検出した。集石 1 は長軸約 2.4 m、短軸 1.3 m を測り、20~30 cm 大の石数個と、10 cm 前後の礫で構成されている。検出面から深さ約 0.2 m 程を掘りくぼめており、底面はほぼ水平である。集石 2 は 1.2 m × 1.8 m の規模をもち、やや丸みを帯びた楕円形を呈する。周辺の地山面には礫が含まれているため、範囲を把握し、また人為的なものであるか否かを確認する目的で断ち割りを行った結果、最も深い部分で約 0.15 m 地山面を掘り込んでいることが明らかになった。集石 1・2 共に、遺物は出土していない。

その他、C 区では縄紋時代の土抔数基を検出している。いずれも不定形なプランを呈し、深さも 0.1 m 前後と浅いものである。

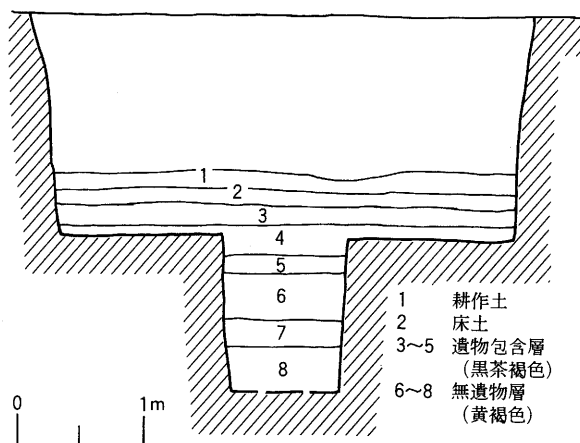
第 2 節 D 区検出の遺構 (第 8・10・11 図)

南北約 35 m、東西 6~12 m の調査区内に、10 m × 3 m の試掘溝 (Tr.) 2 箇所を設定し、遺構及び遺物包含層の確認を行った。Tr. 1 における各層の堆積状況は第 10 図に示したとおりである。厚さ約 50 cm の遺物包含層中には、土師器・黒色土器・瓦器等の平安時代から室町時代に至る時期の遺物が含まれている。6 層以下は無遺物層となり、8 層からは湧水が認められた。南側に設定した Tr. 2 の状況は、基本的には Tr. 1 と同様であるが、Tr. 1 では各層共ほぼ水平に堆積するのに対し、Tr. 2 では無遺物層である 6 層が東に向け下降し、4・5 層はこの底くなった部分に堆積している事、また、3 層が存在しないなど若干の相違点が認められる。遺構は検出されず、包含層中の遺物も調査区西側のやや高い地点から流れ込んだものと考えられる。

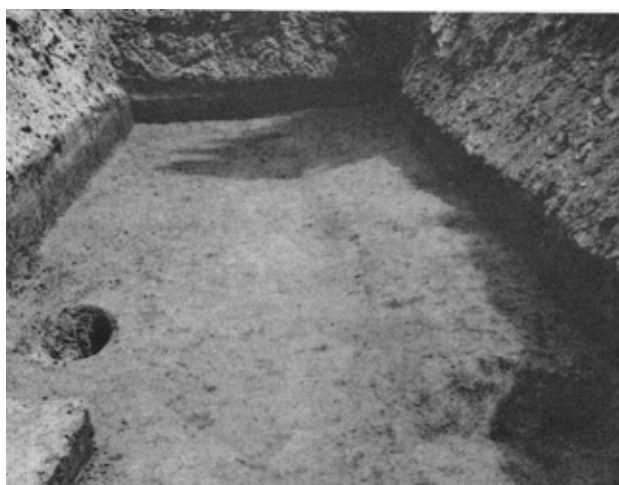
第 3 節 F 区検出の遺構

(第 9 図、P L. 4-3)

D 区の南西に設定した調査区である。包含層が 0.4~0.6 m 堆積し、瓦器・土師器 (C 32)・天目茶碗 (C 37) などが出土している。明瞭な遺構は存在せず、D 区 Tr. 2 に連続す



第10図 D区 Tr.1 北壁面土層図



第11図 D区 Tr.2 (北から)

と思われる落ち込み状の地形や、近世以降の用水路に伴う石垣を検出したのみである。

第4節 F～H区検出の遺構（第9・12図、P L. 5～7）

F～H区の基本層序は、上から第1層—耕作土、第2層—床土、第3層—茶褐色土、地山の順である。遺物包含層である第3層は、H区の一部を除きほぼ全域に認められ、含まれている遺物には、瓦器・土師器等の鎌倉～室町時代にかけての時期のものと、少量の近世陶磁器の他、サヌカイト片数点がある。周辺の地形は、A～C区同様、南西から北東に向い緩く下降している。

S X 01 第2次調査において検出された土墳墓である。東西長約2 m、南北長1.3 mの規模をもち、約0.4 m 遺存している。平面形は、東側部分では長方形を呈するが、西側はやや丸みを帯びる。底面は1.8 m×1 mを測り、ほぼ平らであるが、西から東に向い若干底くなる。主軸はE—22°—Nである。出土遺物には瓦器碗（C 1）がある。瓦器碗は口縁部を上にし、底面から約4 cm高い位置で検出している。

S K 15 F区北東隅で検出された土坑。楕円形のプランを呈するが北辺はやや直線状となる。長軸2 m、短軸1.2 m、深さ1.5 mを測る。埋土中には炭が多く含まれており、底面には1～2 mmの厚さで焼土が堆積している。出土遺物は少く、土師器・青磁碗の細片のみである。

S K 16 S K 15の南で検出した不定形な土坑である。1.7 m×0.6 mの規模をもち、深さは約0.3 mである。遺構の北側及び西側に2.2 m×1.4 m、深さ0.1 m前後の凹みが認められる。

S K 17 長軸8 m、短軸3 mの楕円形を呈する土坑。約0.2 m 遺存し、底面はほぼ平らである。出土遺物には土師器皿C 25・26がある。

S K 18 1.3 m×1 mの規模をもち、隅円の五角形を呈する。埋土である暗茶褐色土中には、径10～15 cm程の小礫が多量に含まれている。出土遺物は備前焼甕の胴部片のみである。

S K 19 F区中央で検出した土坑。1辺3.8 m前後の正方形のプランを呈し、深さは約0.4 mを測る。埋土は灰茶褐色ないし暗茶灰色の砂質土であり、遺構周辺の地山面である灰褐色砂層と近似する。土坑壁面に沿って40～50 cm大の河原石を検出したが、原位置を保っているかどうかは不明である。出土遺物は比較的多く、土師器皿C 28・瓦器碗C 49・常滑焼甕胴部片C 45・青磁碗C 39等がある。

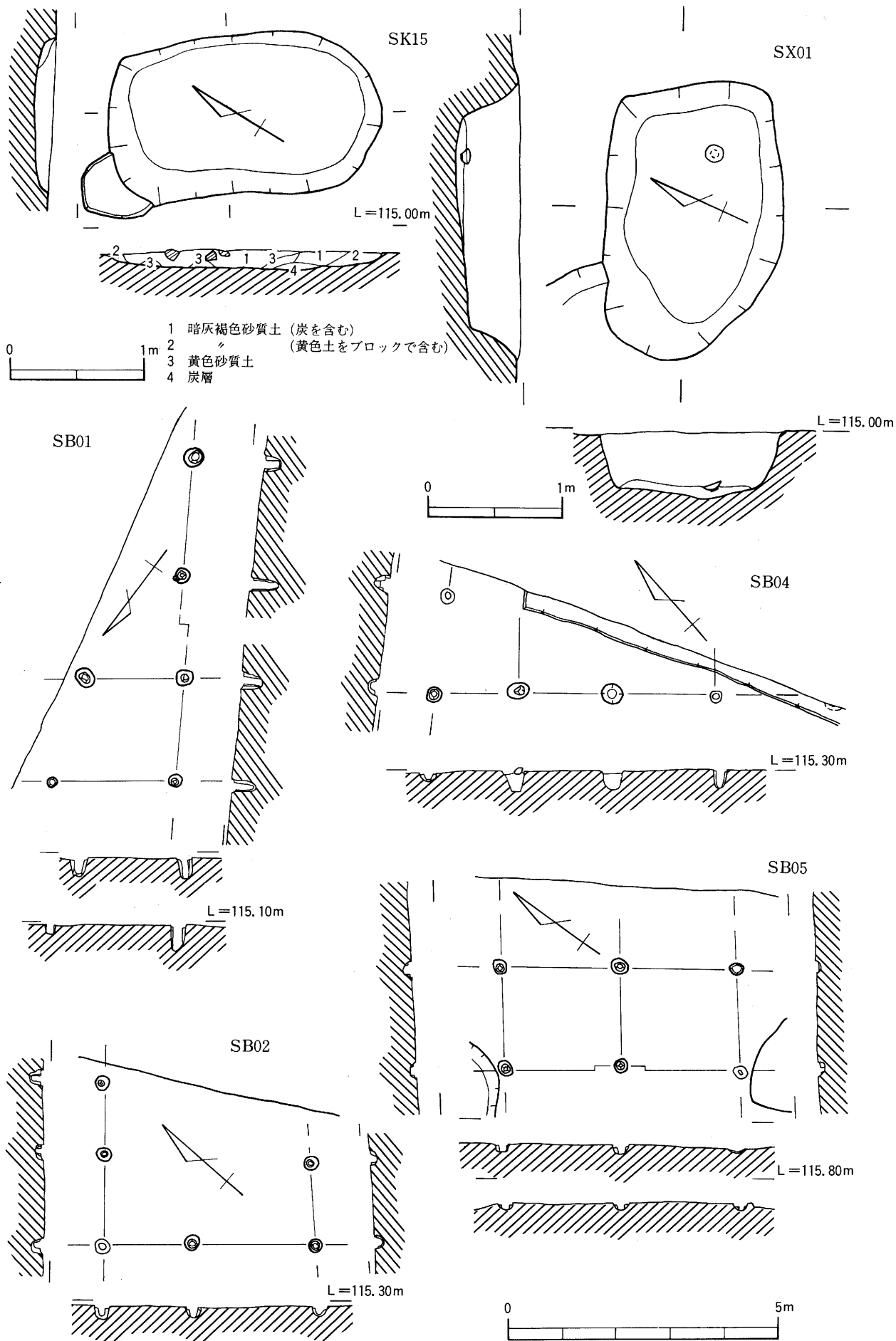
S K 20 G区北西部に位置し、第2次調査において検出した円形の土坑。規模は1.4×1.3 m、深さ0.4 mを計測する。壁面の傾斜は垂直に近く、床面はほぼ水平である。遺物は出土しておらず、時期や遺構の性格については不明である。

S K 21 F区南端部で検出した土坑。1辺0.6～0.7 m前後の隅円正方形のプランを呈する。土坑内には30～20 cm大の河原石が10数個認められる。

S K 22 規模1.7 m×0.8 mの楕円形の土坑。遺存度は悪く遺構検出面から5 cmを残すのみである。埋土中には、炭・焼土が多く含まれており、F区北東部分で検出したS K 15と近似した様相を呈する。

S K 23 G区中央部付近で検出した、直径4 m前後の規模をもつ円形の土坑。断面はすり鉢状を呈し、底面の平面形は正方形となる。深さは0.3 m 遺存する。出土遺物には瓦器碗C 11がある。

S B 01 F区南隅で検出した南北3間以上、東西1間以上の規模をもつ掘立柱建物。柱間は南北間2 m・東西間1.8 m、掘形には円形のものと方形のものとがあり、最大0.4 m、深さ0.5 mを計測する。南北方向をN—34.5°—Wにおく。



第12図 F～H区遺構実測図

S B02 南北2間、東西2間を検出。柱間は1.4～2.3mと不揃いである。掘形は0.2m前後の円形のもので、深さは約0.3m遺存する。

S B03 S B02の南に位置し、1間(1.5m)×1間(2.1m)以上の規模をもつ。円形の掘形は径0.4m、深さ0.3～0.4mを測る。

S B04 S B03の南、G区南端部において南北1間×東西3間を検出し、東西方向をN-47.8°-Wにおく。東西方向の柱間は西から1.6・1.8・2mと順次広くなる。掘形は径0.2～0.4mの円形、深さは0.3m前後である。

S B05 H区南端で検出した南北2間×東西1間以上の総柱の建物。水路を挟んだG区において対応する柱穴が無いことから、2間×2間程度の規模が考えられる。南北方向をN-35.5°-Wにもち、柱間は南北1.8m、東西2.2mを測る。掘形は径0.3m、深さ0.1～0.15m、柱心は0.15m前後である。

第5節 I～M区検出の遺構(第13・14図、P L. 8～12)

地表面の標高は約116mある。基本層序は、上から耕作土(厚さ15cm)、床土(2～5cm)、地山の順で、I・K区の南半部にのみ、中・近世土器を包含する暗茶褐色土(3～6cm)が見られた。地山は黄褐色土ないし茶褐色砂質土で、部分的に径5～30cm程の河原石が含まれている。遺構はすべて地山面において検出された。

検出した遺構には掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、水田、溝がある。これらの遺構の所属時期は中世と近世に分けられるので、この順序で記述する。なお、遺物に早期から晩期に及ぶ縄文土器が見られるが、これらは中・近世の遺構・包含層から出土したもので、同時代の遺構はない。

中世の遺構には掘立柱建物と土坑がある。これらは出土した土器から、13～14世紀頃のものである。遺構はI・J区に集中し、東へ行くに従い稀薄になる。

S B06 I区にある東西2間の掘立柱建物で、柱間は2.5m等間である。柱掘形は径20～30cmの楕円形で、深さが15～30cmある。

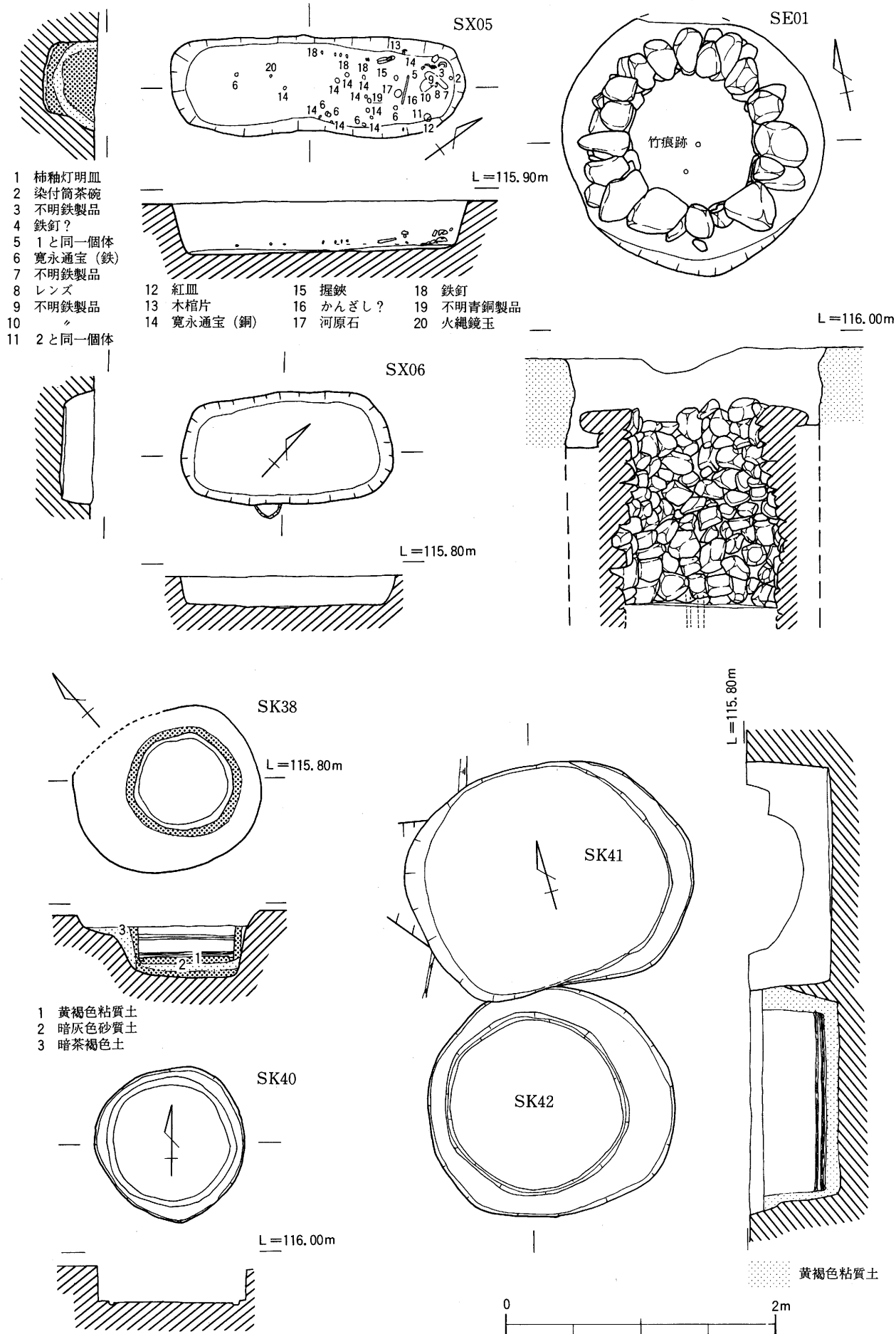
S K26 J区にある東西4.7m、南北3.7～4.0m、深さ0.3mの土坑で、暗茶褐色の埋土中に瓦器(C 49・50)、土師器片等が含まれている。

S K25・27～32 I・J区、K区西端にある平面が円形を呈する土坑である。径はいずれも1m前後で、深さが0.2～0.5mある。S K27から土師器小皿(C 56)・鍋(C 59)が、S K31からは土師器小皿(C 54)が出土している。これらの土坑は墓の可能性がある。

近世の遺構には掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、水田、溝がある。遺構の大部分は、出土した遺物から見て18世紀代のものである。

掘立柱建物の柱穴はK区とM区に集中して見られるが、建物の規模は不明である。柱穴は、やや楕円形で径20～30cmのものが多く、底に河原石を置くものも見られる。

S E01 M区東端にある径約1mの石組井戸で、石材には人頭大の河原石が用いられている。掘形は径1.9mの円形を呈す。上面から1.9m掘り下げたところで、井戸廃棄儀礼に伴うと見られる竹の痕跡を検出した。痕跡は2個あり、径は4.0cmと4.5cmである。井戸の深さは崩壊の危険があったため確認出来なかった。



第13図 I～M区遺構実測図

S K 24・38～42・45・46 桶を入れ込んだ土坑である。いずれも桶もののものは残存せず、痕跡が残る。I区西端にあるS K 24は、径1.7m、深さ0.7mの掘形の底に、黄褐色粘質土を6cmの厚さに敷き、その上に桶を据える。桶の痕跡は径1.45mある。K区中央部にあるS K 38は、掘形が東西1.4m、南北1.2mの偏円形の平面で、深さ0.5mを測る。この掘形の底に、下から黄褐色粘質土（厚さ5cm）、暗灰色砂質土（6cm）、黄褐色粘質土（5cm）を順番に積み上げて敷き、その上に据えられた桶の側板にも5cmの厚さで黄褐色粘質土を巻く。桶の痕跡は径0.73mあり、3条のたがが見られる。埋土中から軒平瓦や寛永通宝等が出土している。S K 38の南西にあるS K 39は、径1.6m、深さ0.85mの掘形内に、径1.2mの桶の痕跡が残る。埋土中よりふいご羽口と鉄滓が出土した。S K 40はL区西寄りにあり、径1.1m、深さ0.3mの掘形内に、径0.95mの桶の痕跡が見られる。M区西端にあるS K 41は、掘形が東西2.1m、南北1.6mの偏円形の平面で、深さ0.6mを測る。桶の痕跡は長径1.7m、短径1.45mあり、3条のたがの痕跡が部分的に残る。S K 41に南接するS K 42は、掘形が径1.8m、深さ0.65mの規模で、底に黄褐色粘質土を7cmの厚さに敷いて桶を据え、うらごめにも黄褐色粘質土を使用する。桶の痕跡は径1.35mあり、2条のたがが見られる。S K 45はM区西寄りの北端にあり、径1.5mの桶を径2.2m、深さ0.75mの掘形に据えている。S K 45の東にあるS K 46は、掘形が東西3.0m、南北1.7mの楕円形の平面で、深さ0.75mを測る。桶の痕跡は長径1.5m、短径1.2mある。

S K 35 K区中央部北端にある土坑で、北側は発掘区外に及ぶ。東西2.0m、深さ0.6mあり、埋土中から陶磁器（C 74～87）が多く出土した。

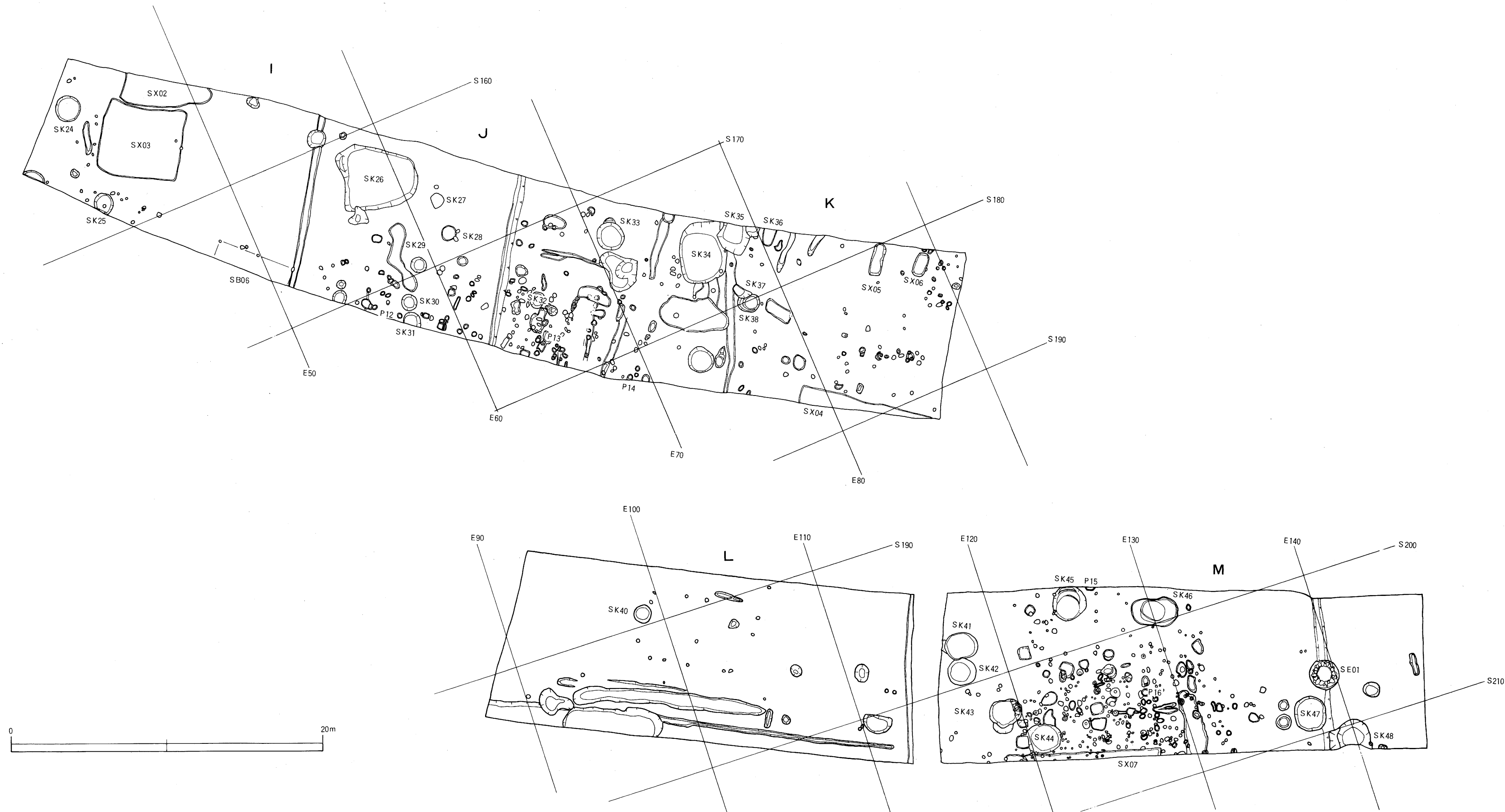
S K 43 M区西端にある東西2.1m、南北1.6m、深さ0.75mの土坑で、東辺壁にのみ、径10～35cmの河原石を積み上げている。

S K 47 S E 01の南に近接する土坑である。平面は一辺が約1mの隅丸方形で、僅かに南北が長い。深さは0.7mを測る。S E 01の付属施設で、所謂「井戸尻」であろう。

S X 05 K区北東隅にある木棺墓である。掘形は隅丸長方形の平面で、上端で長さ2.2m、幅0.7m、下端で長さ1.95m、幅0.5mある。深さ0.4mあり、底はわずかに南に傾斜している。主軸の方向は磁北に対して37度東に偏している。埋土は上から暗茶褐色土、黄褐色粘質土、暗茶褐色砂質土、暗灰色粘質土（厚さ2～3cm）の順である。このうち黄褐色粘質土は当初、木棺上面を覆っていたものであろう。木棺は腐朽し、わずかに棺材の小片が遺存していたにすぎないが、鉄釘等遺物の出土状況から見て、木棺は掘形いっぱいに据えられていたものと思われる。出土した遺物は、柿釉灯明皿1、染付筒茶碗1（C 92）、紅皿1（C 91）、握鉢1（C 98）、かんざし（？）1（C 99）、眼鏡のレンズ1、用途不明鉄製品4、同青銅製品1（C 101）、寛永通宝（銅）17、同（鉄）9、球形の河原石1、火縄銃玉1（C 100）、木棺片1、鉄釘20である。遺物に穀殻が付着しているものも見られるから、木棺底に穀殻が敷かれていたものと思われる。頭位は遺物の出土状況から北向きであろう。被葬者は出土遺物から女性と思われる。なお、南半部の遺物について原位置を確認出来なかったものもある。

S X 06 S X 05の東に隣接し、形状から墓と思われる。隅丸長方形の平面で、長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.2mある。主軸の方位は磁北より45度東に偏している。遺物は出土しなかった。

S X 02～04・07 I・K・M区にある水田である。I区にあるS X 03は東西5.3m、南北4.5mの規模で、水田の方向は磁北に対して38度東に偏している。



第14図 I～M区遺構平面図

第IV章 遺 物

第1節 石器 (第17～20図、表2～8、P.L. 13～16)

石鏃 (S 1～62)

石鏃は無製品と考えられるものを含めて336点出土している。基部の形態から凹基式 (I類)、平基式 (II類)、凸基式・円基式 (III類)・尖基式 (IV類) に分類した。

凹基式 (S 1～45) 石鏃の中で最も点数の多いタイプである。S 1～41は長さ15～25mm前後のものが多く、S 1が長さ11.5mm・重量0.14gで最小、S 32が長さ31.5mm・重量2.86gで最大である。厚さは最小1.4mm、最大4.5mmある。2～3mm前後のものが大半を占め、他のタイプに比べ薄身である。平面の形態は、長さが幅に対し1～1.3倍前後の正三角形に近い形態を示すものと、1.3～2倍前後の縦長のもの (S 22・24・26～32・35・40) とに分けられる。基部の挟りは直線的で逆V字状に深く挟るもの (S 6・11・12・25) と、丸く彎曲し浅いもの (S 14・15・26・30)、丸く深いもの (S 18・19・28) 等がある。側辺の形態には、直線的にのびるものの他に、やや内彎気味となるもの (S 20～22・26・33) や、最大幅が基辺より上位にあるため「く」の字状になるもの (S 13・14・32)、細かな調整剥離が行われ鋸歯状を呈するもの (S 3～6・10・11・23) などがある。ほとんどは左右対称であるが、S 27は逆刺の片方が未調整のため非対称となっている。また、S 38・39は、凹みが浅く平基に近い形態を示し、基辺は斜めになっている。両面に数回の調整剥離を行い丁寧に仕上げる S 11・12・25・26や、片面のみに調整を行う S 16・17などがある。大剥離痕が両面に残るものは、鏃身の中央部に小さく残すものの他、S 7のように側辺にのみ調整剥離を施すものがある。S 42～45はいわゆる鋏形鏃である。平面形態は正三角形に近く、長さに比べ幅の広いものが多い。

平基式 (S 46～52) 出土点数はさほど多くはないが、完形のものが多い。長さが16～18mm前後の S 46・47と、22～26mmの S 48～52の二つに分けられる。厚さは平基式よりやや厚身で3～4mm前後のもの

地区 種類	A(N)	A(S)	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	2次 試掘	表採	計	%
石 鏃	199	26	75	19	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8	7	336	70.4
石 錐	12	2	8	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	5.0
スクレイパー	9	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	2.3
楔形石器	7	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	1.9
石 錘	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.4
石 斧	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2
そ の 他	47	11	25	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	94	19.7
計	274	39	114	26	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	10	7	447	99.9
%	57.4	8.2	23.9	5.5	1.2	0	0	0.2	0	0	0	0	0	0	2.1	1.5	100.0	

表2 出土石器の組成

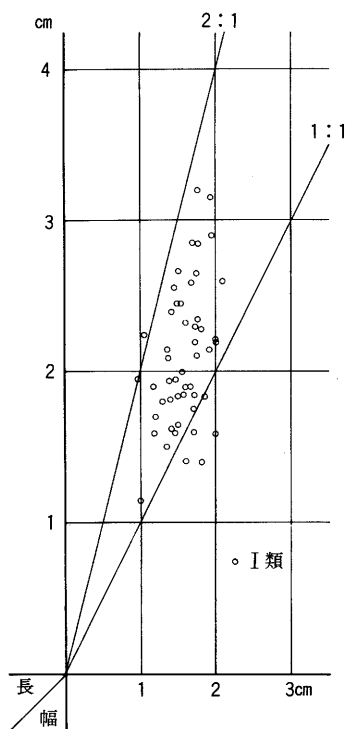


表 3 石鏃 長さとの比率 1

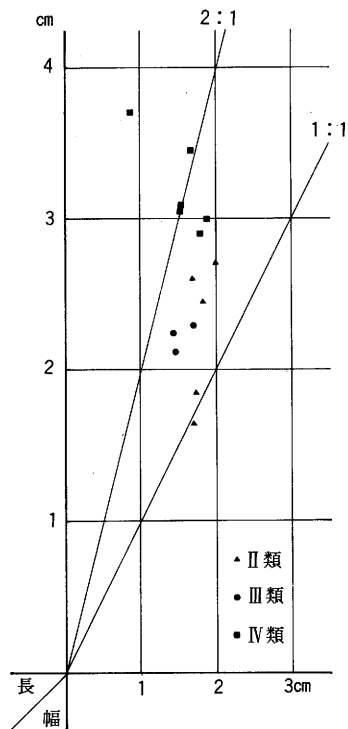


表 4 石鏃 長さとの比率 2

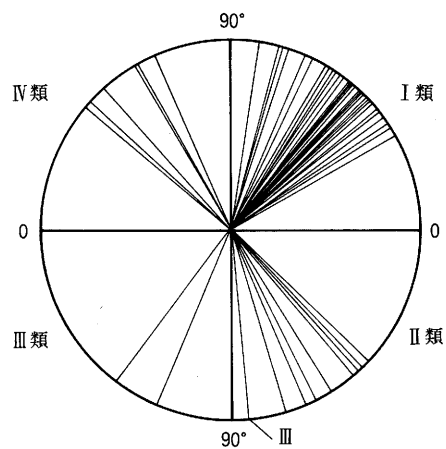


表 5 石鏃 尖端角度分布

類	個数	%
I	202	60.1
II	44	13.1
III	7	2.1
IV	7	2.1
他	76	22.6
計	336	100.0

表 6 石鏃 類別点数

類	個数	平均(g)
I	108	0.73
II	23	1.43
III	7	1.11
IV	6	2.49
他	17	1.52
計	161	0.99

表 7 石鏃 類別重量平均値

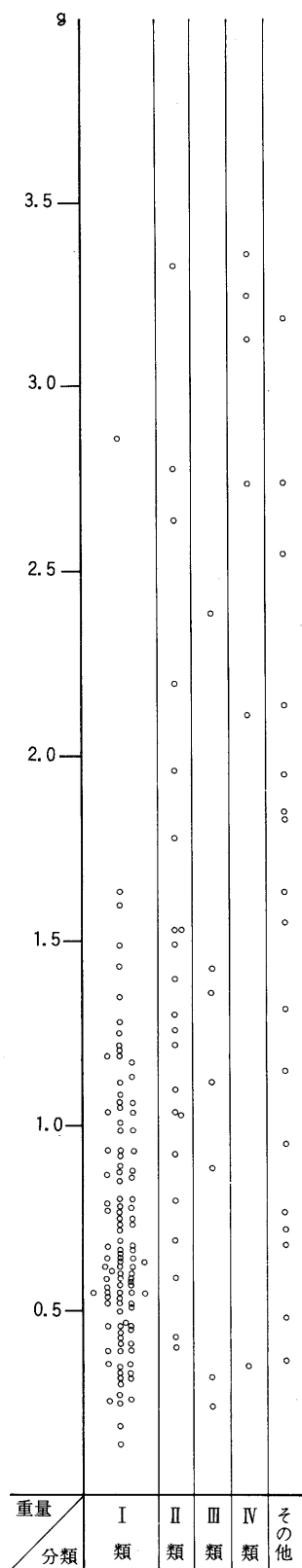


表 8 石鏃重量分布

のが多い。大剥離面を残す例が多く、調整剥離も平基式に比べ粗いものが多い。側辺は直線状のものと、ゆるく外彎すもの、途中で凹むものがある。基辺は大半が中心軸と直交するが、S48・49は斜めになる。

凸基式 (S53~62) 凸基式は円基式 (S53~56) と尖基式 (S57~62) とに分けられる。全体に粗い調整剥離を施すものも多く、長さは29~35mm、重量も3g前後と大型である。S59~61は両面に大剥離面が残り、断面も扁平な六角形を呈する。S57は下半部を欠損するが、大きさと調整剥離の状態から尖基式と考えた。S58は茎のつくりだしはそれほど明瞭でないが、有茎式に近い形態のものである。

石錐 (S63~72)

24点出土し、その内10点を図示した。S63~67は頭部と錐部の区別が比較的明瞭である。石鏃に似た形態を持つ個体が多く、頭部の形状は四角形あるいは三角形を呈する。調整は全体に粗く、大剥離面を両面に残すものが多い。S64は頭部上端に原礫面が残る。S68・69は縦長の薄身の剥片下端部にのみ粗く調整剥離を施し錐部とする。S70~72は頭部と錐部とが明確には区別されず、全体にずんぐりとした楕円形ないし棒状を呈する。側辺全体に調整剥離を施すが、S71・72は中央部に大剥離面が残る。最大幅を中央やや上位にもち、10mm前後のものが多い。錐部の断面形は、殆どが菱形かそれに近い多角形を呈する。

スクレイパー (S73~79)

11点出土する。多くは、横長の剥片を使用し、縁辺に刃部作り出しのための調整剥離を加える。素材となった剥片は、全て両面に大剥離面を残し、S74・77のように一部に原礫面を残すものも多い。一辺ないし二辺に両面から調整剥離を施し刃部とする。刃部の形態は、S73が外彎する他は概ね直線状である。刃部幅は0.8~1cmのものも多く、角度はS73・74・76・78が55~56°、S77は62°である。S75は全周に粗い調整剥離を両面から施している。S79は厚さ3mmほどの剥片を素材とする薄身のもので、刃部幅は0.5cmと他に比べ浅く、角度も50°と小さい。

楔形石器 (S80~83)

楔形石器として9点を確認している。平面形態は、長さ2.5~4cm、幅1~2cm前後の長方形もしくは台形を呈する。凸レンズ状の断面形をもち、厚さは1cm前後のものが多い。対向する両縁に調整剥離を施し、殆どは両側縁に截断面をもつ。また、S80は片方に原礫面を残している。

その他 (S84~88)

S84は長軸方向の中央部がくびれ、糸巻き状の形態をもつサヌカイト製の打製石器である。くびれ部から上半部にかけては全面に調整剥離が施されているが、下半部は側縁にのみ剥離を行い、中央部と下端部は大剥離面をそのまま残す。長さ5.4cm、幅は上半部2.2cm・くびれ部0.8cm・下半部1.6cmを測る。厚さは上半部が0.7cm、下半部が0.3cmである。S85・86は長軸の両端に切目を作る石錘。S86は完形で法量は長さ9.7cm・幅4.6cm・重量110gである。S87は両側面を使用する小型の砥石である。長さ約13cm、使用面の幅は1~1.2cmを測る。S88は砂岩系の石材を用いる磨製石斧である。刃部の一部と基端部が欠損する。側辺は直線的で、刃部に最大幅をもち、基端部に向い狭くなる。刃先は約2/3を欠損するが、残存部から両刃の外彎刃と判断できる。断面はやや丸みを帯びた扁平な長方形を呈し、側辺は良く研磨され、明瞭な面をなす。残存長9.3cm・最大幅6.4cm・最大厚2.5cm・残存重量255gを測る。

第2節 縄紋土器 (第21～23図、P L. 17～19)

縄紋土器は調査区のほぼ全域から出土するが、大部分はA～C区に集中し、D～M区からは中世及び近世の遺構や包含層から少量が出土しているのみである。時期は早期から晩期に及ぶが、後期中・後葉の遺物は出土していない。また、後期前葉の遺物が大半を占め、早期～中期・晩期のものが少ないことなど、各時期の出土遺物量にも偏りが見られる。細片が多く、全体の器形を窺える資料が少ないため、口縁部や体部片で紋様の認められる遺物を中心に、主要なものについて時期別に説明を行う。

早期 (J 1)

J 1は山形押型紋を施す深鉢の体部片である。器肉は7mmで、内面は丁寧にナデを行い平滑に仕上げる。胎土は粗く、クサリ礫が多く含まれている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。早期の遺物はこの1点のみである。

前期 (J 2～5)

J 2～5は内外面共に二枚貝条痕による器面調整が行われている。焼成は良好で、胎土中には角閃石が含まれており、暗褐色を呈する。J 2は条痕による調整の後、外面に押し引きによるC字形の連続爪形紋を施紋する。J 3は外面にD字の爪形紋を施す。内面はナデにより平滑に仕上げられている。

中期 (J 6・7)

J 6は縦位に撚糸紋が施紋される。色調は外面が灰褐色、内面は桃灰色である。焼成はやや軟質で、2～3mm大の砂粒を含む。J 7は外面に堅い繊維を撚った縄紋を施し、突帯を貼り付けた後、突帯上に爪形紋を施紋する。外面は黄灰褐色、内面は淡褐色を呈し、砂粒が多量に含まれている。

後期 (J 8～100)

J 8～13はいずれも口縁部上端面にも縄紋が施され、内面は丁寧にナデられている。黄味を帯びた灰褐色を呈し、砂粒は比較的多い。J 8・10・11・13は外面に縄紋と沈線紋を施す。J 8の沈線は幅が5mm前後あり、口縁端部は尖り気味である。J 9・12はやや粗めの縄紋を、転がす方向を変えて施紋する。J 9は外面の一部にのみ縄紋が見られる。J 10は口縁部に沿って1本の沈線を巡らし、その下に幅1cm程の沈線で区画をつくり、口縁端部と区画内には縄紋が施される。J 11は胎土中にクサリ礫が含まれている。J 14・15は縄紋と沈線紋を施すものであるが、沈線はJ 8・10に比べ、幅も細く断面も鋭い。口縁部は共にヨコナデが行われ、J 15は内側に折れ曲がる。J 16・18～22は波状口縁の波頂部である。J 16は口縁に沿って平行に2本の沈線を引き、その下方に沈線を平行に垂下させ区画をつくり、口縁部上端面と沈線間に縄紋を施す。J 18は口縁部が内側に肥厚し、沈線紋は上端面にまでおよんでいる。淡茶褐色を呈し、砂粒が多く含まれている。J 19・20は円形の肥厚した波頂部に刺突を行い、口縁に沿って沈線を入れる。J 19は胎土も密で、焼成は堅緻である。J 21は2本の平行沈線紋を口縁部上端面から体部へと連続せる。J 22は台形状の突起部の中央に1孔を穿ち、横方向からも穿孔を行う。沈線はJ 21と同じく口縁部上端面から連続させる。角閃石を含み、外面暗茶褐色、内面は黒褐色を呈する。J 17は口縁部を内側に短く折り曲げる。J 23～30は口縁部の破片である。J 23～27は縄紋と沈線紋を施す。J 24～26の口唇部は面をなし、J 26には縄紋が施紋される。J 28は口縁部に沿って刺突状の刻み目を巡らした後、縄紋を施す。J 29は沈線紋とタテ方向の刻み目を入れる。J 31～44は体部片である。J 31は縄

紋・沈線紋・刺突紋を施紋する。J 32はヨコ方向に沈線紋を施した後、斜め方向にも刻み目状に沈線を入れる。J 33～38・42は縄紋と沈線紋をもつ。J 39～41・43・44は沈線紋のみを施紋する。沈線の幅はJ 31・40が2 mm前後、その他は4～5 mmである。J 44には竹管状の工具が使用されている。内面はナデで平滑に仕上げられているものが多く、焼成も良好である。色調は茶褐色のもの（J 31～35）、灰褐色のもの（J 38・39・44）、桃褐色を呈するもの（J 36・37・40～43）がある。J 45～48は3本沈線の施紋を基本とするものである。J 45は口縁端部がやや肥厚し、端部は面をもつ。J 46は内外面と上端面に沈線を施し、外面の沈線下方に縄紋を施紋する。J 47は幅4 mm程の沈線を密に入れ、末端を絡ませる。内外面とも丁寧にヘラミガキが行われており、器肉は4 mmと薄手である。焼成は堅緻で、淡茶色を呈し、胎土も密である。J 48は沈線を施紋し、沈線間に縄紋を施す。J 49は把手である。沈線と縄紋を渦巻状に入れる。J 50～52は山形口縁の突起部である。J 50・51は中央部に刺突を行い、上端部は沈線と横方向からの穿孔が施される。J 50は刺突紋の周囲にも沈線が入られる。角閃石を含み、暗茶褐色を呈する。J 52は中央部に大きく1孔を穿ち、上端面に沈線を入れる。頂端部の2ヵ所には刺突が行われている。J 53・54は鉢である。J 54は外面をミガキ、内面はナデにより仕上げられている。焼成は共に良好で、J 53には砂粒が比較的多く含まれる。J 55～57は波状口縁の波頂部に円形及び連続する孤状の沈線紋、刺突紋及び縄紋を施紋し、紋様帯を構成する。J 55は上端面にも縄紋が施される。J 58～61は口縁部内面に沈線紋を巡らす。J 58は口縁部を内側に肥厚させる。J 59は口唇部の内外面に、J 60は内面に縄紋を施し、J 60はさらに刺突紋を施紋する。J 61は外面に5本以上、内面に2本の沈線が入る。浅鉢と考えられる。J 62は外側に拡張させた部分に2本の沈線と縄紋を施紋する。J 63は外面に縄紋と沈線紋をもつ。J 64・65は沈線紋の入る体部片である。J 66は突帯を十字に貼付ける。J 67はタテに貼付けた突帯上に刻み目を施す。J 68は2本の沈線間に刻み目を入れる。J 69は口縁部を上方に拡張し、突起部に穿孔を行い、外面には刺突紋と沈線紋をもつ。丁寧にナデが行われており、焼成も堅緻である。J 70・71は小型の鉢と考えられる。共に口唇部から外面にかけて縄紋を施す。J 72・73は口縁部が尖り気味で、外面に縄紋が施紋される。J 73には補修用と考えられる穿孔が行われている。J 74～94は外面に貝殻条痕による器面調整が施されているものである。内面の調整は貝殻条痕のものと、ナデを加え平滑にしているものがある。口縁部は肥厚するものや、面取りを行うもの、丸く納めるものがある。J 95～98は深鉢、J 99・100は小型の鉢の体部片と考えられる。

晩期（J 101～104）

J 101は内面に炭化物が付着する底部近くの破片である。J 102は口縁端部を外側に肥厚させた壺形土器である。J 103・104は肩部に貼付け突帯を巡らし、ヘラによる刻み目を入れる。J 101・102・104は胎土中に結晶片岩を含み、焼成も比較的良好である。

底部（J 105～122）

底部は20点前後出土しているが、細片が多く、体部への立上りの状況を確認できる資料は極めて少ない。J 106～121は平底で、底部径が9 cm以内のもの（J 108～112）や、10～12 cm前後のもの（J 105～107・113・114・120）と、それ以上（J 115～119・121）のものに分けられる。J 122の外面はケズリ調整のためやや凹む。その他のものはナデによる調整が行われている。胎土中には砂粒が多量に含まれ、焼成も軟質のものが多い。J 123・124は丸底で、灰褐色を呈し、焼成も良好である。

第3節 中・近世ほか（第15・16・24～29図、P.L. 20～25）

1. A～H区出土遺物

瓦器（C1～24）

瓦器には椀（C1～18）・皿（C19～24）・鉢がある。

C1は口径13.1cm・器高4.1cm・高台径5.2cmを測る完形品である。口縁部は強いヨコナデのため段がつき、高台の断面形態はやや丸みを帯びた三角形を呈する。内面のミガキは同心円状に口縁部から見込みにかけて連続して行う。焼成後底部外面にヘラによる印を入れる。胎土は微砂粒を少量含み、灰白色を呈する。C2は復元口径15.6cmのやや大型の椀である。軟質で胎土は黄味を帯びた灰色である。C4はC1と同様に口縁部はヨコナデによる段がつく。口径13.3cm・器高4.5cm・高台径5.2cmを測る。C5は口径11.1cm・器高4.0cm・高台径5.7cmを測る。高台の断面形態は台形を呈し、ハの字状に貼付ける。胎土はC2と同様に黄灰色を呈する。C6は口径11.6cm・器高3.9cm・高台径3.6cmの椀。内面は磨滅が著しく暗紋等は不明である。C7は内面に幅2mm前後のミガキを口縁部付近まで施す。器肉は口縁部ほど厚くなり端部は尖り気味である。C8は復元口径10.6cmと比較的小型の椀である。器肉は7mm前後と厚い。C10は口径12cm・器高3.7cmを測り、胎土は黄灰白色を呈する。外面には炭素の吸着が殆ど見られない。C11は全体が磨滅しているため調整や暗紋については不明である。口縁部のヨコナデは他の個体ほど強くない。C3・9・12～18はいずれも椀底部である。高台の断面形態は逆台形に近いC12以外は三角形を呈するもので、C15・17は殆ど高台としての機能を有していない。軟質で胎土が黄灰色を呈する個体が多く、C11・14のように炭素の吸着しないものもある。器肉は5mm前後のものが多いが、C9は2.5mmとやや薄手である。

皿は全て平底のもので、底部から屈曲して口縁部が外上方に伸びるC19・21・23と、直立気味に立ち上がるC20・22・24とがある。調整は口縁部がヨコナデ、底部外面は指押え、内面はナデを行う。胎土は緻密で、C21～23は黄灰色を呈する。C19には粘土の接合痕が見られる。

鉢は口縁部のみの破片である。口縁部はヨコナデ、内面には雑なミガキを施す。器肉は0.9mmと厚く、胎土は微砂粒を含み、灰色を呈する。小破片であるが、復元口径は30.7cmを測る。

土師器（C25～35）

皿C25・26は口径9cm前後で、赤褐色を呈し、胎土中にはクサリ礫が含まれる。C27は口径11.7cm、C28は12.9cmを測る。共に胎土は黄味を帯びた褐色を呈し、密である。C29～35は土釜あるいは土鍋の類である。C29～31・34は口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を内上方につまみ上げる。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面はナデ、内面はハケを施すもの（C29・31）とヘラケズリの残るもの（C30）とがある。C32は短く外反させた口縁部の端部を丸くおさめる。外面はナデ、内面はハケによる調整を行い、内面には口縁部から頸部にかけてススが付着している。C33は口縁部の内面にもハケが見られる。C35は口縁端部を外上方に折り曲げる。灰赤色を呈し、焼成は軟質である。

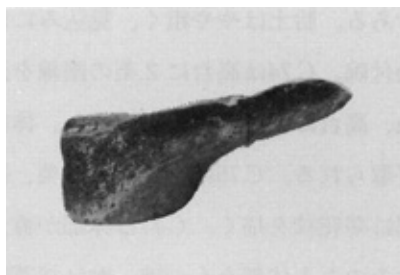
陶磁器（C36～41）

C36・37は美濃・瀬戸系の天目茶碗である。釉はC36が黒褐色、C37は茶褐色を呈する。C38～40は中国製の青磁碗である。C40は体部に線描蓮弁紋を描く。釉は暗緑色を呈し、細かい貫入が入る。高台

内面まで施釉し、畳付部の釉を拭き取る。C41は白磁角杯。C45は常滑焼甕の胴部片である。C44は備前焼播鉢の口縁部。外面には黄白色の自然釉が見られる。C46・47は備前焼播鉢の底部。C46は茶褐色を呈し焼成も良好である。C47は軟質で暗灰白色の須恵質に近いものである。

その他

土錘C42は土師質のもので、長さ3.4cm、最大径1.4cmを測る。C43は瓦質のこね鉢である。第15・16図は弥生土器の壺底部である。外面赤褐色、内面黒灰色を呈し、調整は外面はナデ、内面は磨滅のため不明である。底部径3.7cmを測る。弥生土器はA区SD01から出土したこの1点のみである。また、古墳時代（6世紀）の須恵器蓋杯片が1点出土している。銭貨は2点出土し、C114は寛永通寶、C116が北宋銭の紹聖元寶（初鑄1094）である。



第15図 弥生土器



第16図 弥生土器実測図

2. I～M区出土遺物

瓦器（C48～51）

C48～51はいずれも椀である。C48は口径13cm・器高3.8cm・高台径5.6cmを測る。器肉は0.9mmと厚く焼成も良好である。口縁部はヨコナデのため段がつく。C49～51は底部のみの破片である。C49は焼成は良好であるが炭素の吸着は殆ど認められない。C50・51は灰白色の胎土をもち軟質である。高台径は4.4～4.9cmを測る。

土師器（C52～59）

皿（C52～57）は胎土中にクサリ礫等の微砂粒を少量含み、黄赤褐色を呈する。C52は口径12.6cm・器高3cmを測り、他に比べ大型である。底部は平らで、口縁部はヨコナデを行い、体部外面には指頭痕が残る。C53～56は口径8.5cm前後を測る。C53は底部の器肉が1.2cmと厚く、口縁部にススの付着が見られる。C55の底部外面には板目圧痕が残る。土鍋C58・59は口縁部を外反させ端部をつまみ上げる。口縁部は共にヨコナデを施し、体部はC58の外面はナデ、内面がハケ、C59は内外面共ナデによる調整がなされている。胎土は砂粒を多く含み、C58には結晶片岩が含まれている。焼成は良好で、色調はC58が淡赤褐色、C59は黄褐色を呈し、C59の外面にはススが付着している。

陶磁器（C60～95）

C61は黒褐色の釉を施した美濃瀬戸系の天目茶碗。C62は伊万里焼の仏飯碗である。杯部には草花紋を描く。C63は伊万里焼の青磁筒茶碗。畳付部には砂が付着している。C64は伊万里焼の染付皿。C65はガラス質の淡草緑色釉を施した後、暗緑色の上絵付けをした碗である。C66は伊万里焼の青磁染付碗。口縁部内面に四方襷紋、見込みには2状の圈状を巡らす。釉調は外面がにごりのある明緑色、内面は灰白色である。C67は飴釉がかかる京焼風の碗である。釉調は艶のある黄灰色を呈し、見込みに3ヶ所の目跡が見られる。高台部分は露胎で暗赤褐色である。C68は志野焼の皿。白濁釉をかけ高台部分は露胎である。胎土は黄味がかかった灰白色を呈し粗い。C69は銅緑釉を施す皿。見込みの釉を蛇の目状に剥ぎ取る。C70は草花紋の伊万里焼染付碗である。畳付は露胎で砂が付着する。高台内に「大明年製」と思われる銘が入る。C71は伊万里焼の小杯。体部には菊花紋を描き、高台脇及び高台に各々1状の圈線を

巡らせる。C72は葉状紋を描く染付の碗である。C73は瀬戸焼と考えられる淡い緑色の釉が施された皿である。胎土はやや粗く、見込みには型押しによると思われる花紋が見られる。C74～77は伊万里焼の染付碗。C74は高台に2条の圈線を巡らし、体部は草花紋、底部外面には銘が入る。C75は高台脇に1条、高台に2条の圈線を巡らし、体部には草花紋を描く。釉は白色を呈し、見込みの釉は蛇の目状に剥ぎ取られる。C76は高台脇に1条、高台に2条の圈線を巡らし、見込みの釉を蛇の目状に剥ぎ取る。体部に菊花紋を描く。C77は体部が直上方に立ち上がる。外面に4条、内面に2条の圈線が入る。C78は丸みのある体部をもつ碗。釉は淡草緑色を呈し細かい貫入が入る。C79は唐津焼の杯である。外面に赤茶色、内面には白色の釉を施し、全体に細い貫入が入る。胎土は茶灰色を呈する。C80・81は伊万里焼の筒茶碗である。C82は伊万里焼二重網目紋の碗。見込みには2条の圈線が入り、中央に五弁花紋が描かれる。高台内には一重枠の渦福銘が見られる。釉はにごりのある白色で、畳付にははなれ砂が付着している。C83は伊万里焼赤絵小杯。C84は浅黄褐色の柿釉が施される灯明皿である。底部は糸切りで、口縁部にはススの付着が認められる。C85は伊万里焼の染付皿。内面に2条の圈線と五弁花紋を描く。蛇の目状に釉を剥ぎ取った見込み部と畳付に砂の付着が見られる。C86も伊万里焼の皿である。釉調は灰白色、露胎部は淡赤色を呈し、見込みの釉を蛇の目状に剥ぎ取る。C87は堺産かと思われる播鉢である。スリ目は細く針金状の工具を使用し、12本前後を一つの単位とする。C88は備前焼の壺。いわゆるお歯黒壺と称せられるものである。口縁部はヨコナデの後、指でつまみ出し片口状にしている。底部外面には静止糸切り痕が残る。C89は染付の煎茶碗。体部上位に花紋、下位に唐草紋を描く。高台内に「大明年製」と思われる銘が入る。C90は丹波焼の甕である。完形で出土し、胎土中には白色砂粒が多く含まれる。外面には茶褐色を呈する釉がかけられ、上半部には自然釉が見られる。C91は伊万里焼の紅皿。成形は型押しによるもので、外面には貝の紋様を型どった放射状の刻み目が入る。C92・93は染付筒茶碗。C92は葉状紋が描かれる。C93は外面に宝紋を描き、内面下半部と底部外面は露胎である。C94は草花紋を描く染付碗である。器肉は厚く、釉調は暗灰白色を呈する。C95は青磁染付の蓋。内面に四方纏紋、2条の圈線、五弁花紋を配す。つまみ部内に二重郭内渦福紋の銘が入る。

瓦 (C96・97)

軒平瓦C96は左弦約1/2が欠損する。平瓦部凸面に「□し原 □□や □七」のへう描きがある。軒丸瓦C97は瓦当部1/4程の破片である。左巻きの三つ巴紋をもち、復元して11個の珠紋を巡らす。

金属製品 (C98～101)

C98は鉄製の握挟。C99は長さ21.4cmの簪と思われる青銅製品である。C100は鉛製の鉄砲弾。直径1.25cm、重量10.45gを測る。C101は棺材と考えられる青銅製品である。

石製品 (C102～104)

C102・103は長方硯。C104は砥石である。C102は長さ12.4cm、幅5.2cm、厚さ1.1cmを測る。C102・103の裏面には線刻状の細かい筋が入る。

銭貨 (C105～113・115)

寛永通寶 (C105～113) と北宋銭の元豊通寶 (C115 初鑄1078) とがある。寛永通寶はS X05出土の26枚を含め、I～M区からは総数29枚が出土している。第29図に示した寛永通寶の内、C105～107は古寛永、C108～113は新寛永である。また、C108・112が鉄銭、その他は銅銭である。

第V章 ま と め

前章までに、今回の調査で得られた成果について報告を行ってきた。ここでは縄紋時代の遺構と遺物についていくつか要点を整理し、まとめとしたい。

1. 縄紋土器

第IV章でも述べたように、今回の調査では早期から晩期に至るまでの長期間に及ぶ時期の縄紋土器を検出している。しかし、各時期の出土量には多寡があり、また、その出土範囲にも違いが見られる。

早期～中期の土器は量的には少なく、主に調査区南半 I～M 区の中世遺物包含層から出土している。早期の J 1 は早期の後半に、前期の J 2～5 は北白川下層 I 式に、中期の J 7 は船元 II 式、J 6 は里木 II 式にそれぞれ比定できる。また、前期の土器の特徴として胎土に角閃石が含まれていることを挙げることができる。後期の土器は縄紋土器全体の 9 割以上を占め、その殆どは A～C 区から出土する。細片が多いため器種構成を明らかにすることはできないが、深鉢が圧倒的多数を占める。J 8～44・49 は中津式に比定でき、J 8・10・13 は中津式でも古い段階に属すると考えられる。J 45～48 は福田 K II 式、J 50～52 は四ツ池式にそれぞれ比定することができる。J 55～100 は北白川上層式 1・2 期と考えられるが、条痕紋を施す粗製の深鉢については、なお検討が必要である。晩期の土器は全て I・J 区から出土したもので、船橋式あるいは長原式と考えられる。

2. 石器

石器の器種別の組成は表 2 に示したとおりである。製品及び二次調整のある剥片が 477 点、剥片および碎片が 5887 点あり、重量は製品及び未製品が約 1.2kg、剥片・碎片が 11.4kg である。製品の中には石鏃等の礫を使用したものも含むが、剥片及び碎片は全てサヌカイトである。石器の中で、石鏃が全体に占める割合が 70.4% と極めて大きく、また、サヌカイトを素材とする打製石器が多数を占め、磨製石器が少なく数点しか出土しないという特色が認められる。

石器の所属時期は、その多くが中世の遺物包含層及び中世以降の堆積層と考えられる A 区 S D 1 上層から出土したものであるため、あまり明確ではないが、石鏃の中には、S 42～45 のようにその形態から古い段階に位置付けられる個体があり、縄紋土器と同様に早期にまで遡り得るものも含まれていると考えられる。

3. 遺構

今回の調査においては、明確な住居址を確認することはできなかったが、第 II 章で述べたように B 区において検出されたピットの多くは竪穴住居の一部と考えている。出土遺物の時期が後期の中津式から北白川上層式にかけてのものが大半を占めることから、後期前葉という大まかな年代を与えることができる。しかし、遺構からの出土遺物が乏しいため、個々の遺構の所属時期について明らかにすることは出来ない。また、遺物包含層及び遺構の検出状況から導かれる遺構の時期差についても、その具体的な

時期の特定には至っていない。

4. 他の遺跡との関係

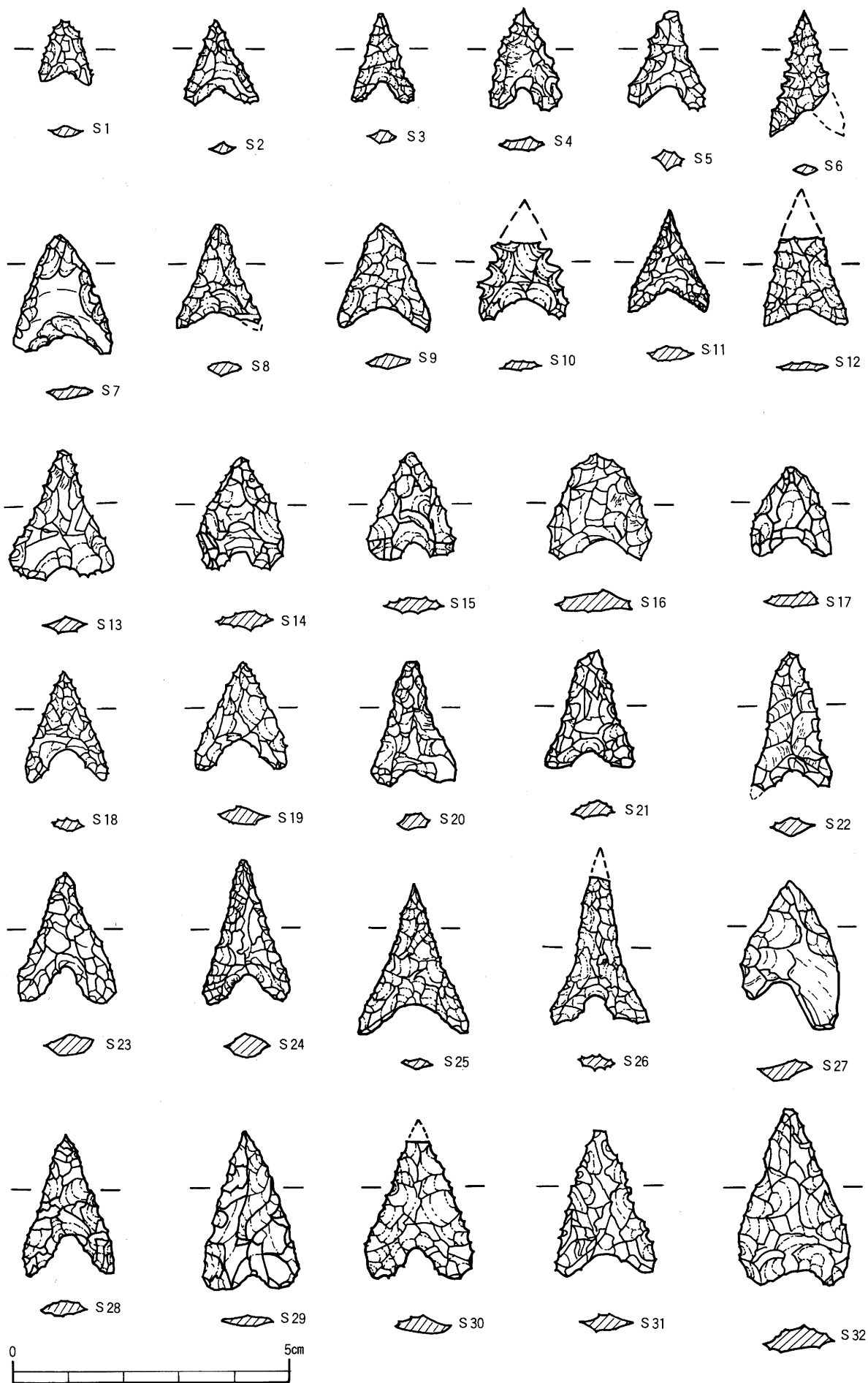
有田川流域における縄紋時代の遺物を出土する遺跡は、石器等の単独出土地を含め、約20遺跡を数える。これらの遺跡のなかで、草創期の遺物を出土する遺跡が2遺跡、以下同様に早期が2遺跡、中期7遺跡、後期6遺跡、晩期5遺跡を数える。次に近接する数遺跡をそれぞれ1つのグループとして考えた時、西原遺跡を中心とする3遺跡、粟生・岩野河の2遺跡、糸野遺跡他の11遺跡、以上3つのグループに分けることができる。それぞれのグループ間の直線距離は各々約9km、8.5kmを測り、また、糸野遺跡から最も近い海岸（湯浅港）までは約8km、有田川の現在の河口までは13.5kmである。さらに、人々が有田川に沿って移動すると仮定すれば、各グループは約10～12km前後の間隔でその分布が認められるようである。このような分布の在り方や、このグループ間或いはグループ内での各遺跡の関連性、その中の粟生遺跡の占める位置等については、各遺跡の内容が今一つ明らかでない現段階では、これ以上論を進めることはできないが、いずれにしても、互いに密接な関連を有していたことは間違いなく、今後の課題としておきたい。

以上、今回の粟生遺跡の調査内容について報告してきたが、これまで殆ど調査例のなかった有田川流域の縄紋時代の遺跡を発掘調査した意義は極めて大きく、貴重な資料を提供したといえよう。また、粟生遺跡は、これまでは縄紋時代中期を上限とする遺跡として考えられてきたが、早期にまで遡り得ることが確認できたこと、中世から近世にかけての掘立柱建物や土壇墓・木棺墓等の遺構を検出し、各種の土器類及び陶磁器をはじめとする豊富な遺物が出土するなど、新たな知見を数多く得ることが出来た。

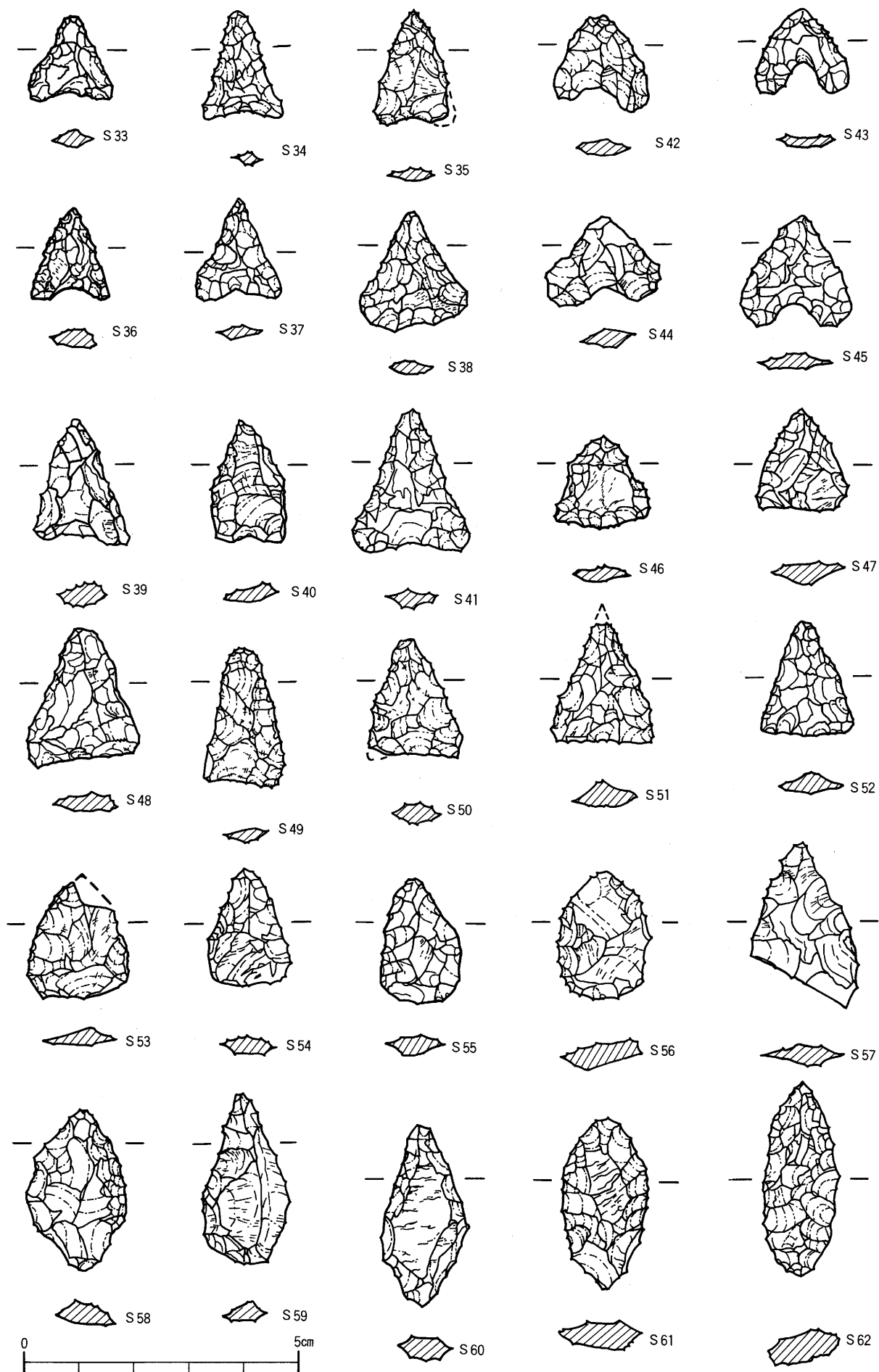
しかし、残された課題も多く、今後の有田川流域における発掘調査や、これまでの調査資料の再検討を行うなかで、粟生遺跡をはじめとする各遺跡の内容について、さらに解明が進むことを期待したい。

参考文献

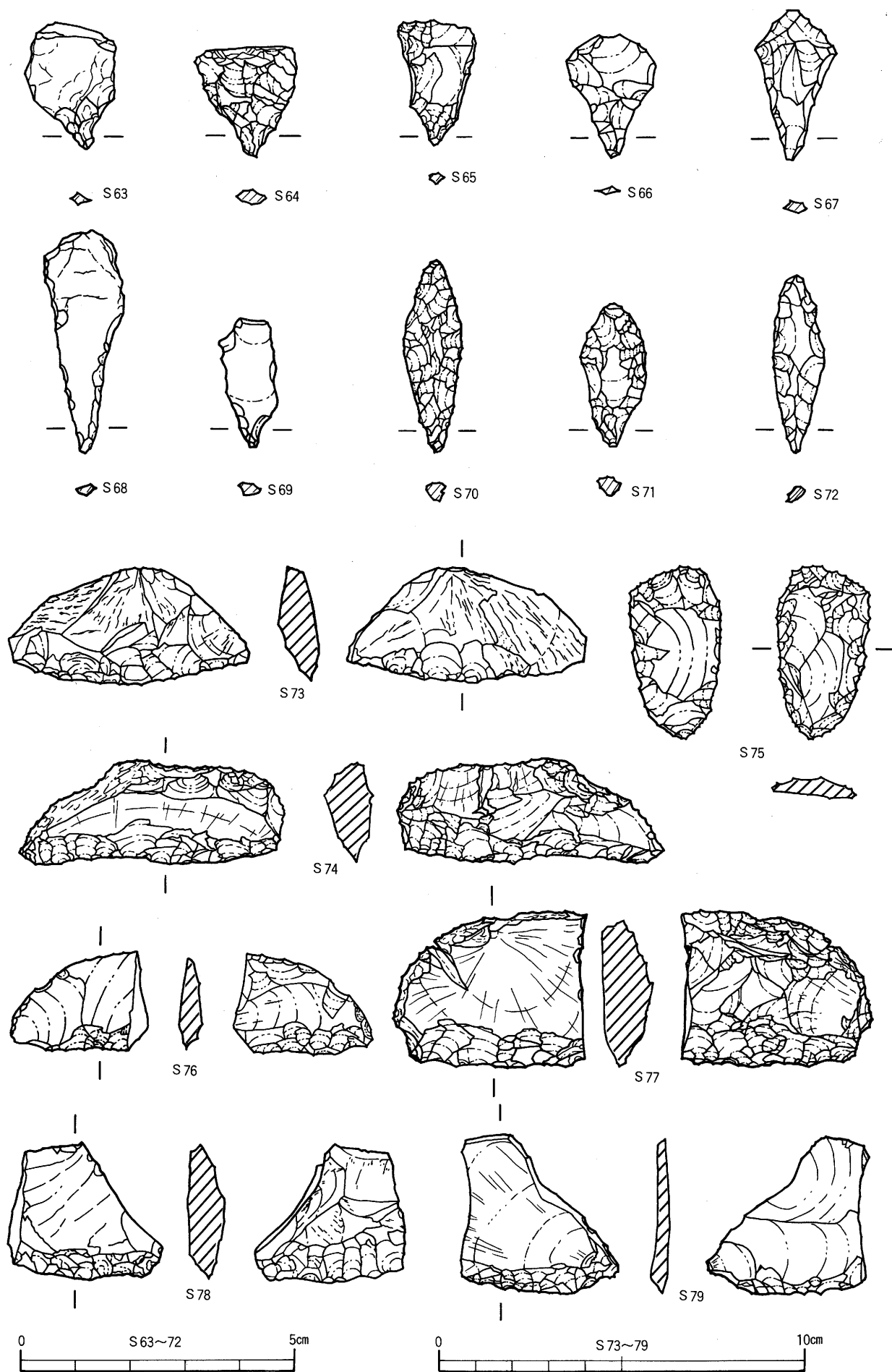
- 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会 1989.3
『和歌山県の地名』日本歴史地名大系第31巻 平凡社 1983.2
『和歌山県史 考古資料』和歌山県 1983
『和歌山の研究 地質・考古編』清文堂 1979.3
『清水町の民俗行事』清水町教育委員会 1984.3
『日光社発掘調査報告』和歌山県立吉備高等学校 清水分校 1966.10
『金屋町誌 上巻』金屋町 1972
中村 貞史「有田郡糸野遺跡出土の縄文式土器」『紀伊風土記の丘年報 第6号』
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1979
『紀伊有田地ノ島遺跡の調査』有田市教育委員会 1960.3
『地の島遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1971.3
『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1985.3
『粟生遺跡』——県道有田・高野線改良工事に伴う縄文時代遺跡発掘調査概報——
財団法人和歌山県文化財センター 1988.3
『粟生遺跡』——県道有田・高野線道路改良工事に伴う第4次発掘調査概報——
財団法人和歌山県文化財センター 1989.3
「粟生遺跡の第3次調査」『和歌山県文化財センター年報1987』1988.6
「粟生遺跡の第4次調査」『和歌山県文化財センター年報1988』1989.6



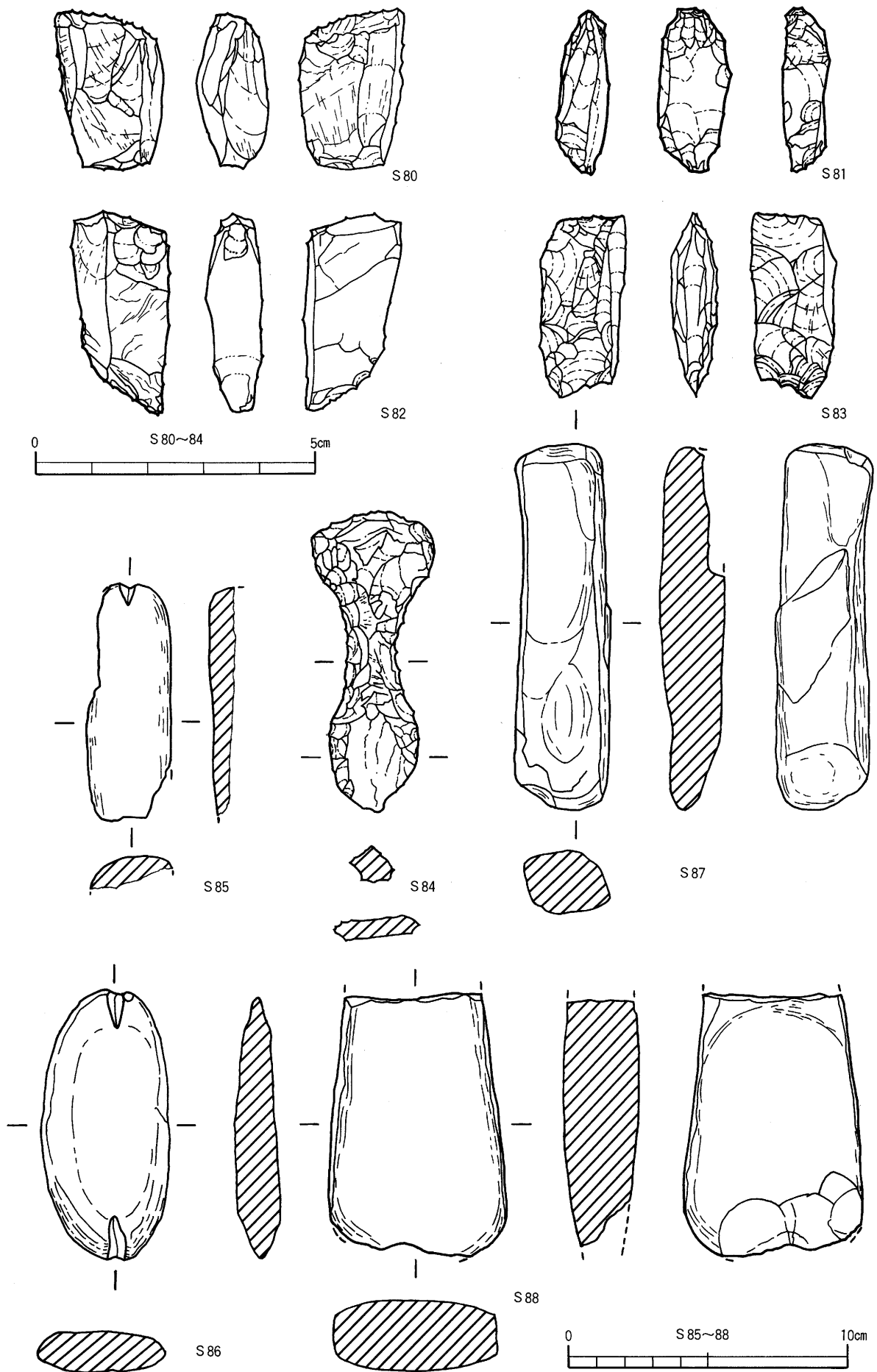
第17图 石器实测图1



第18图 石器实测图 2



第19图 石器实测图 3

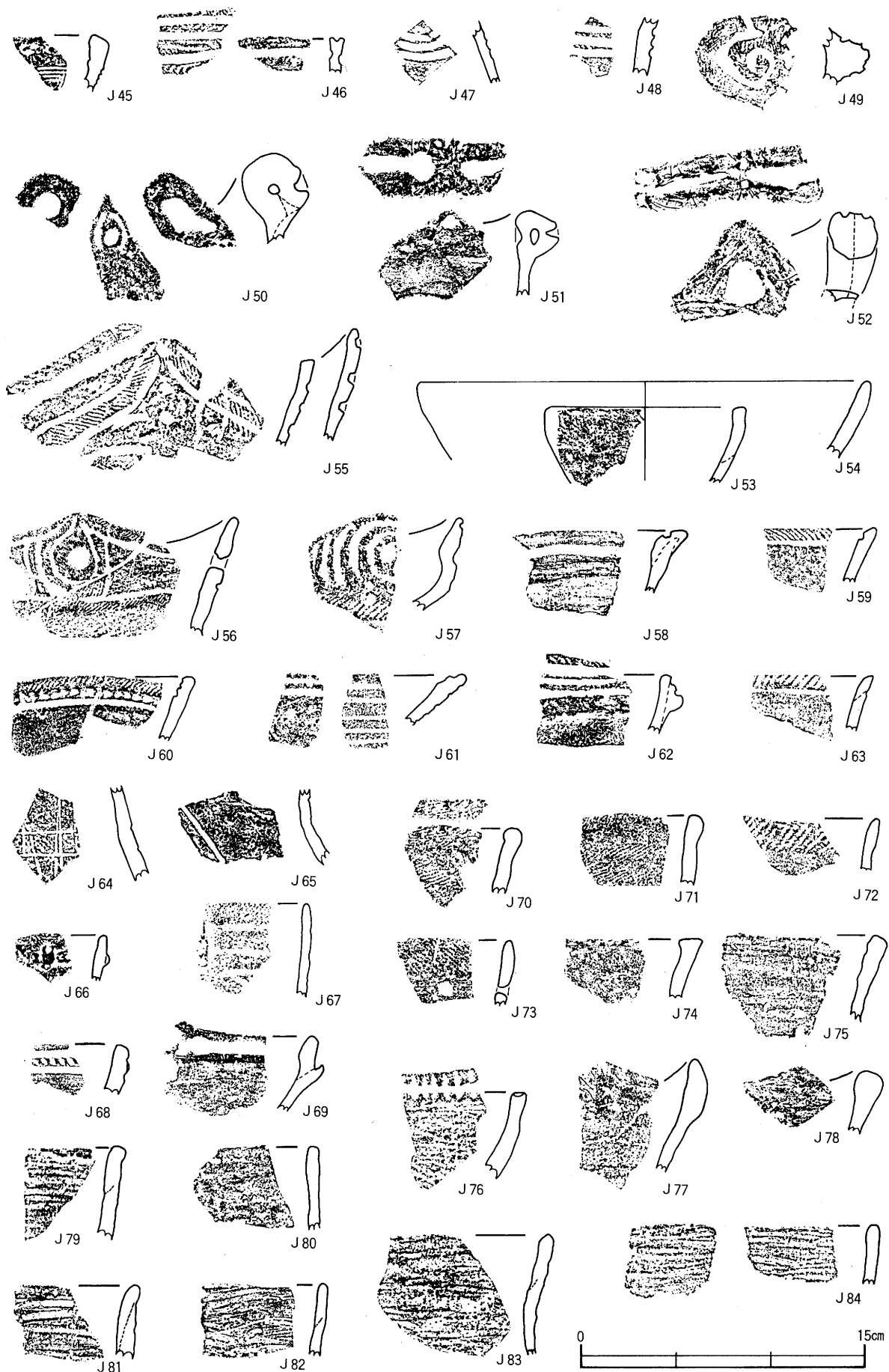


第20图 石器实测图 4



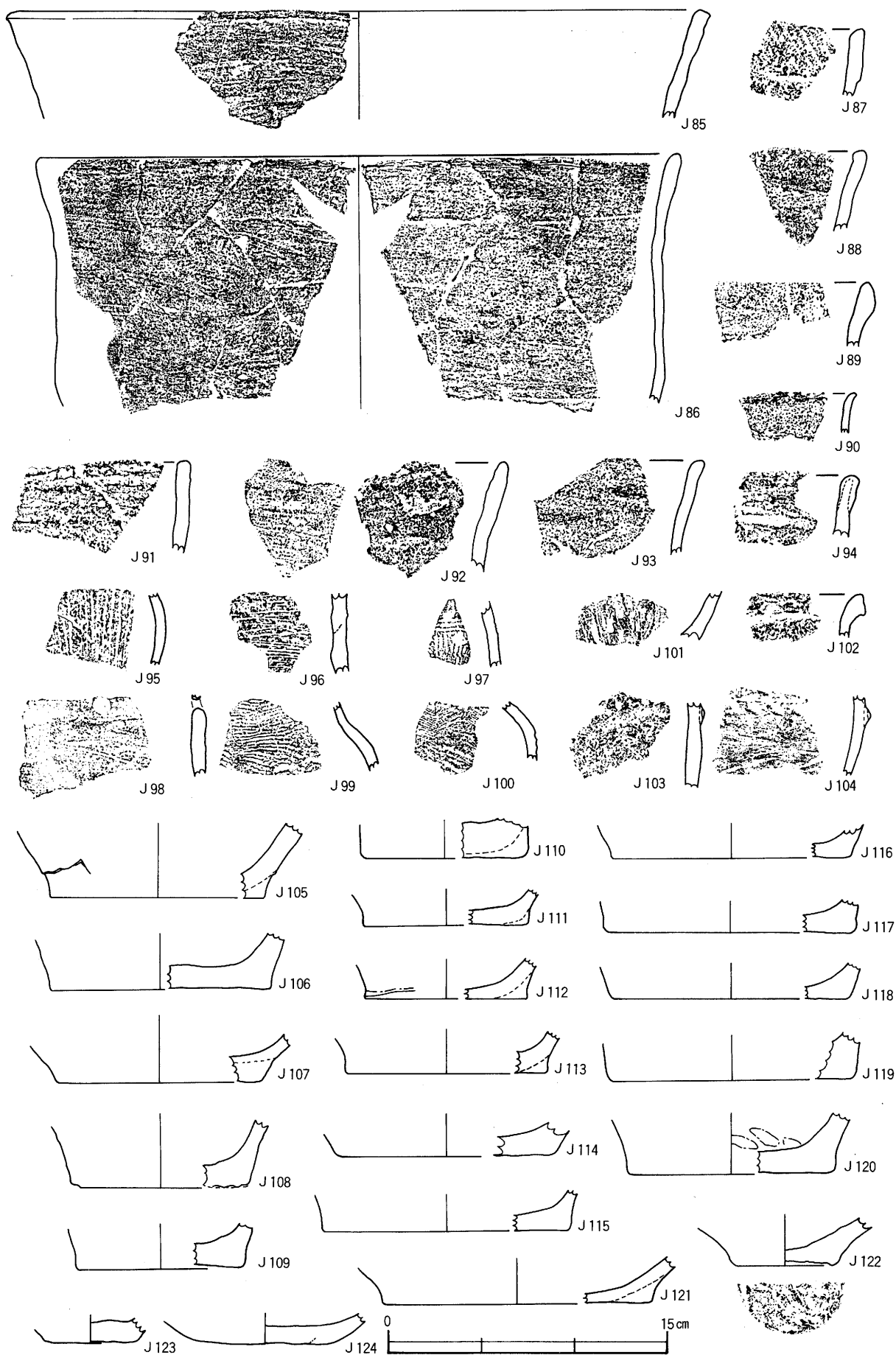
J2—P13, J3—SK39, J4—SK33, J5—P14, J6・40—SK04, J8—P8, J10—SK03, J13—P7,
J18—SK13, J20—P1, J31—SK02, J34—P5

第21図 縄紋土器実測図1



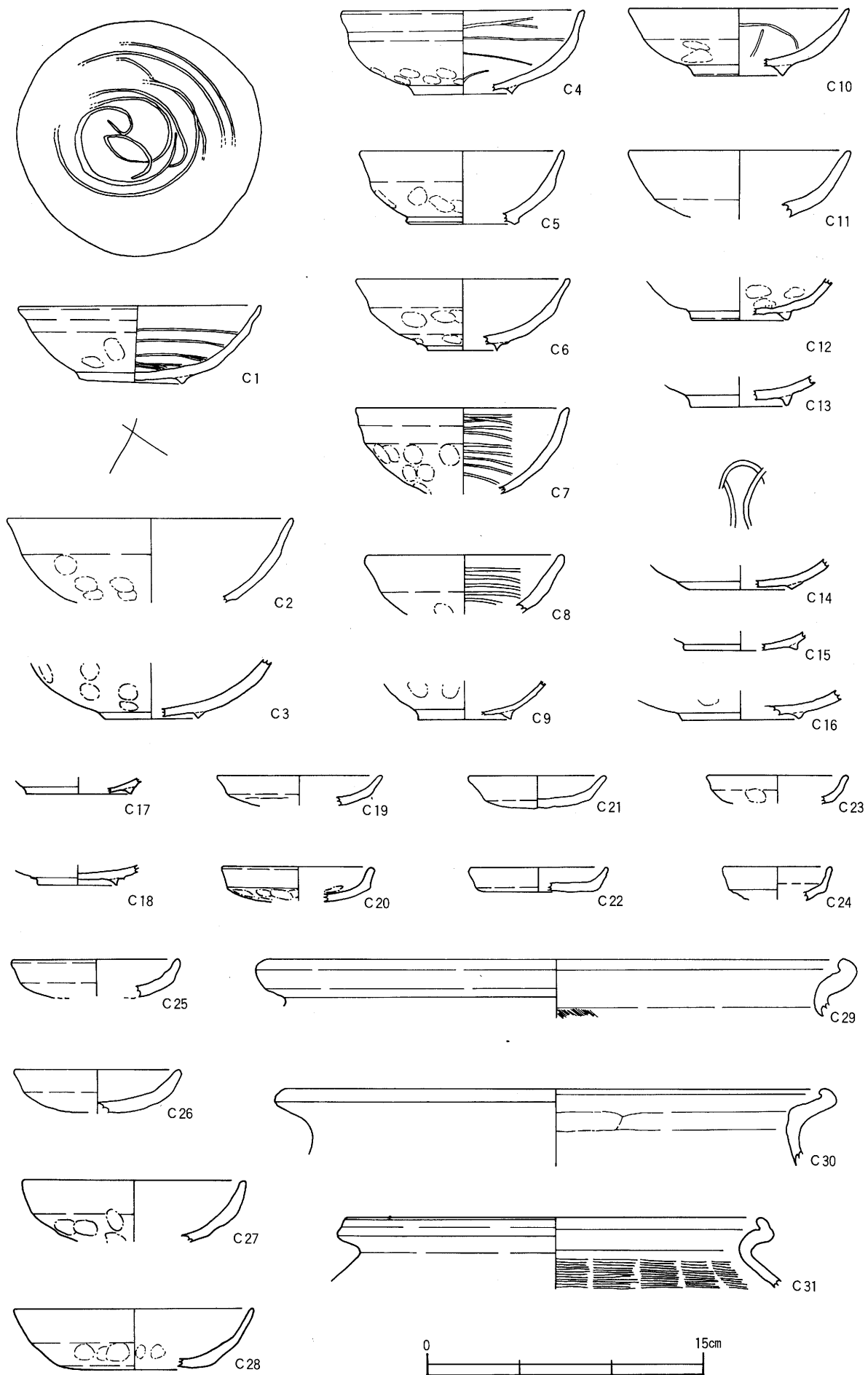
J45・52・83—SK04, J46—P9, J55—P7, J59—SK09, J63—SK10, J67—P1, J68—P6,
J72—P3, J74・82—SK12, J76—SK14, J79・81—SK11

第22図 縄文土器実測図 2



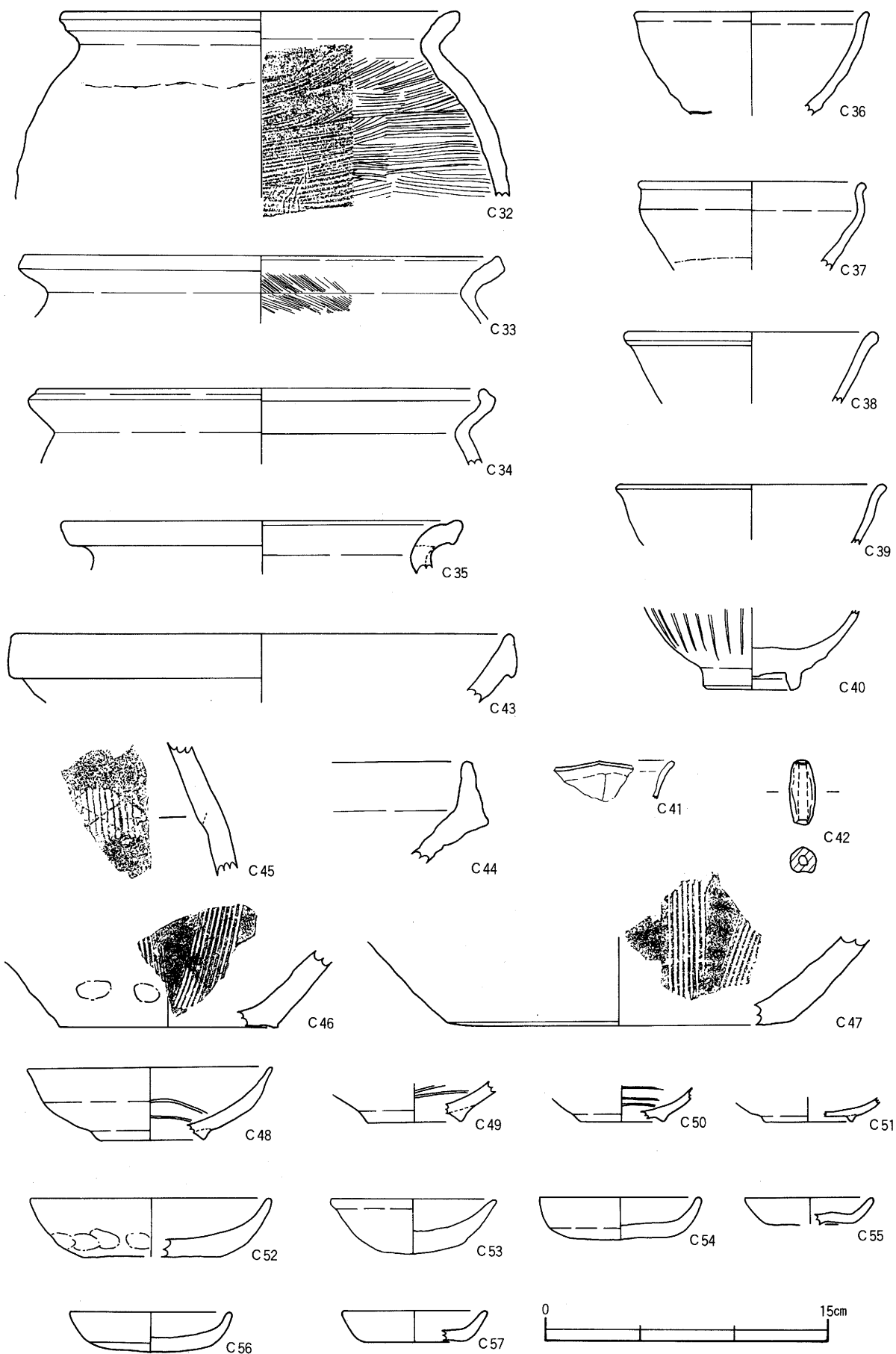
J86・90・109—SK08, J95・116—SK04, J102—SK26, J106・121—SK07, J107—SK11,
J108・123—SK01, J109—SK08, J122—SK48

第23図 縄紋土器実測図3



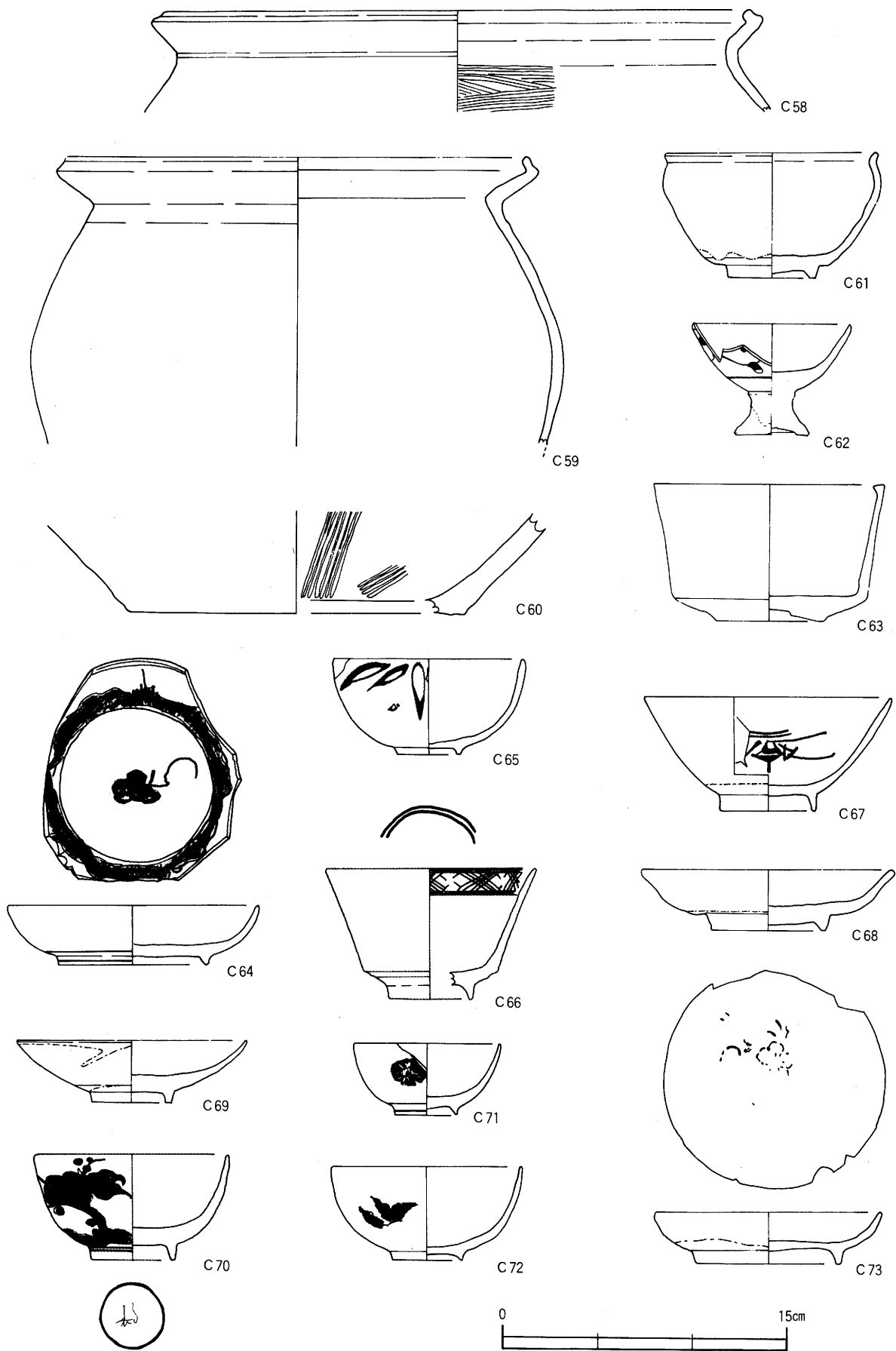
C1—SX01, C10—P11, C11—SK23, C14—SK22, C15—P10, C25·26—SK17, C28—SK19

第24図 中・近世遺物実測図 1



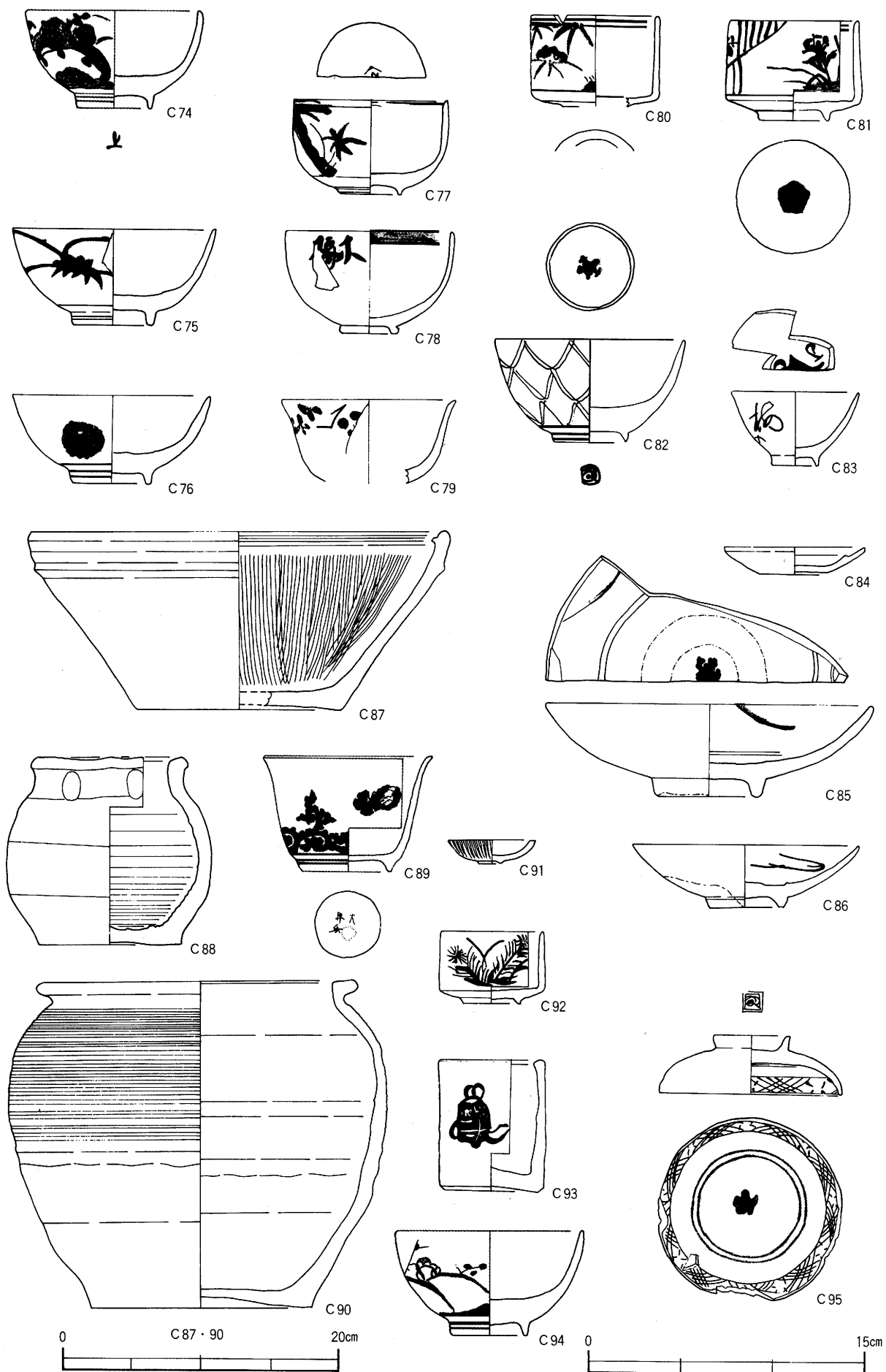
C39・45—SK19, C48—SK32, C49・50—SK26, C51—SK25, C52—SK30, C53—P16,
C54—SK31, C55—P12, C56—SK27

第25図 中・近世遺物実測図 2



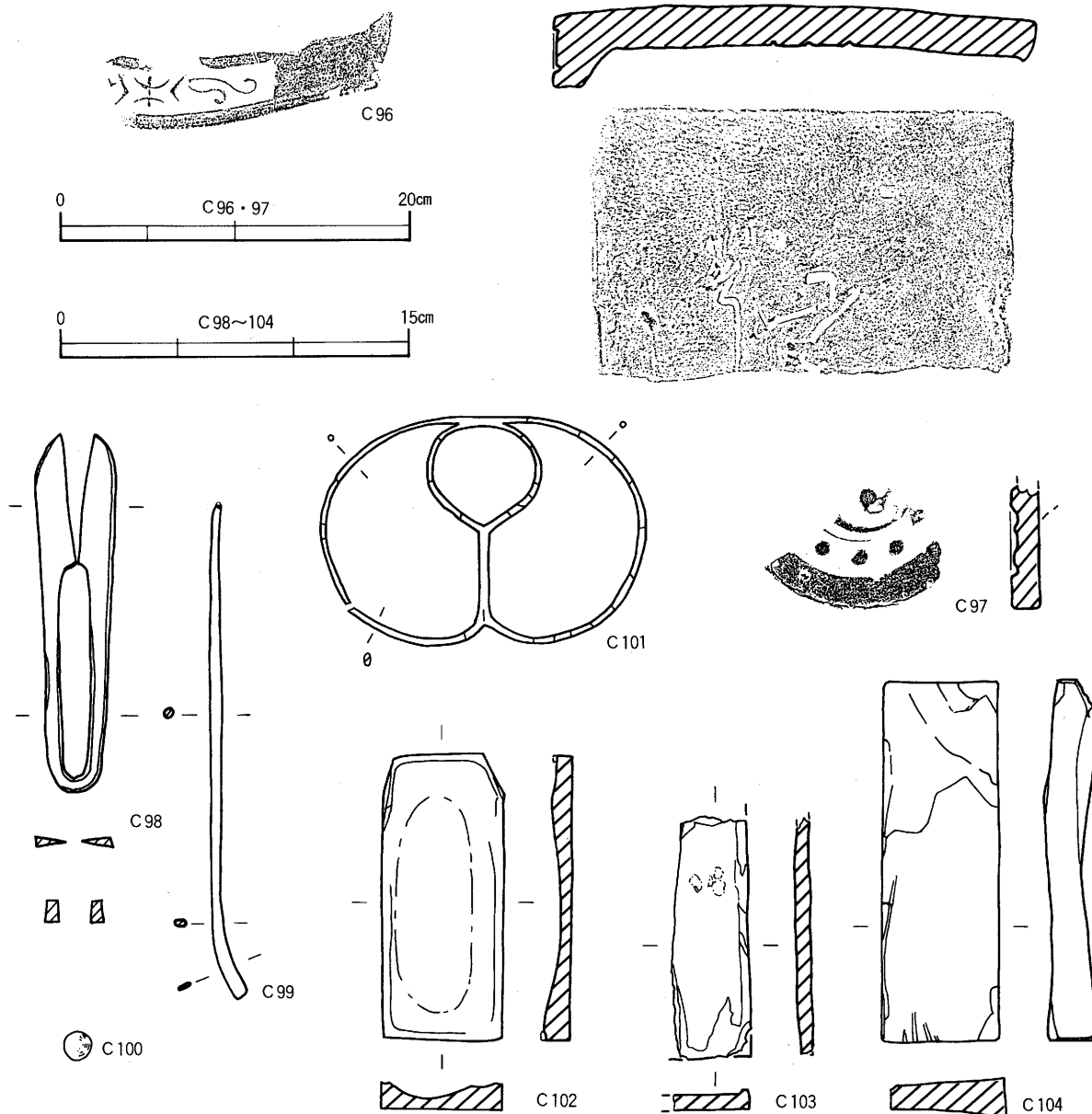
C58—SK32, C59—SK27, C60—SK26, C61~63—SK33, C64—SK24,
C65·66—SK34, C67—SK39, C68—SK40, C69·70—SK44, C71—SK43,
C72—P15·SK47, C73—P15

第26図 中・近世遺物実測図3

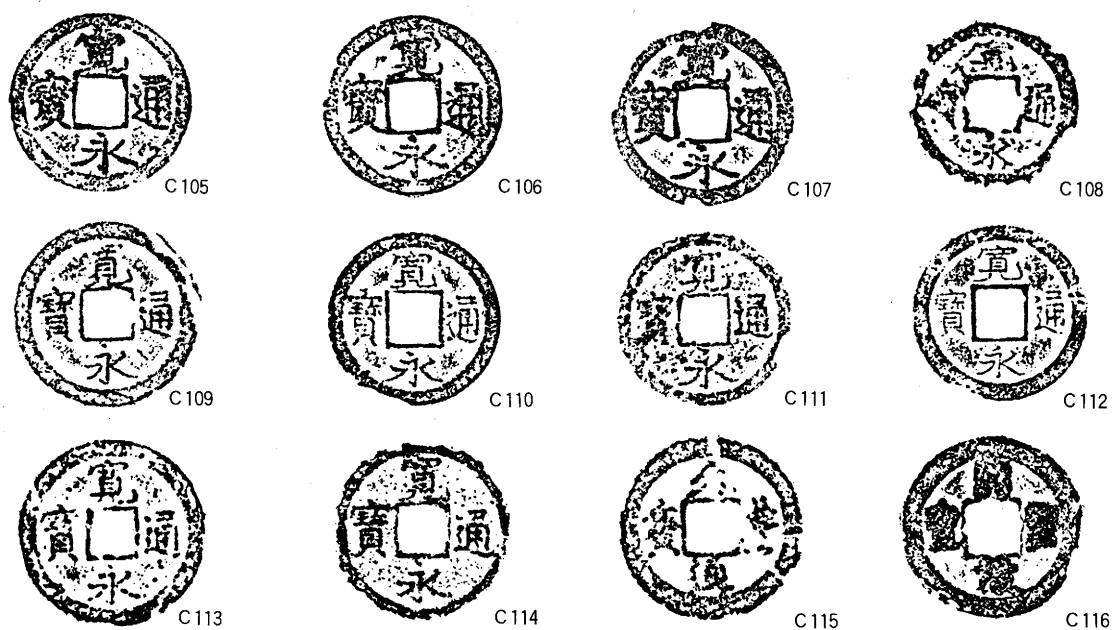


C74~87—S K35, C88~90—S K47, C91~93—S X05, C94—S K48

第27図 中・近世遺物実測図4



第28図 中・近世遺物実測図5 C96—SK38, C97・102—SK47, C98・100・101—SX05, C103—SK43, C104—SK36



第29図 錢貨拓影図 (1:1) C105・106・109~112—SX05, C113—SK47, 他は包含層

図 版



1. 遺跡遠景
(北から)



2. 遺跡全景
(南から)



1. A～C区全景
(北から)



2. C区全景
(北から)



1. SD01



2. 同・
土層
(北から)

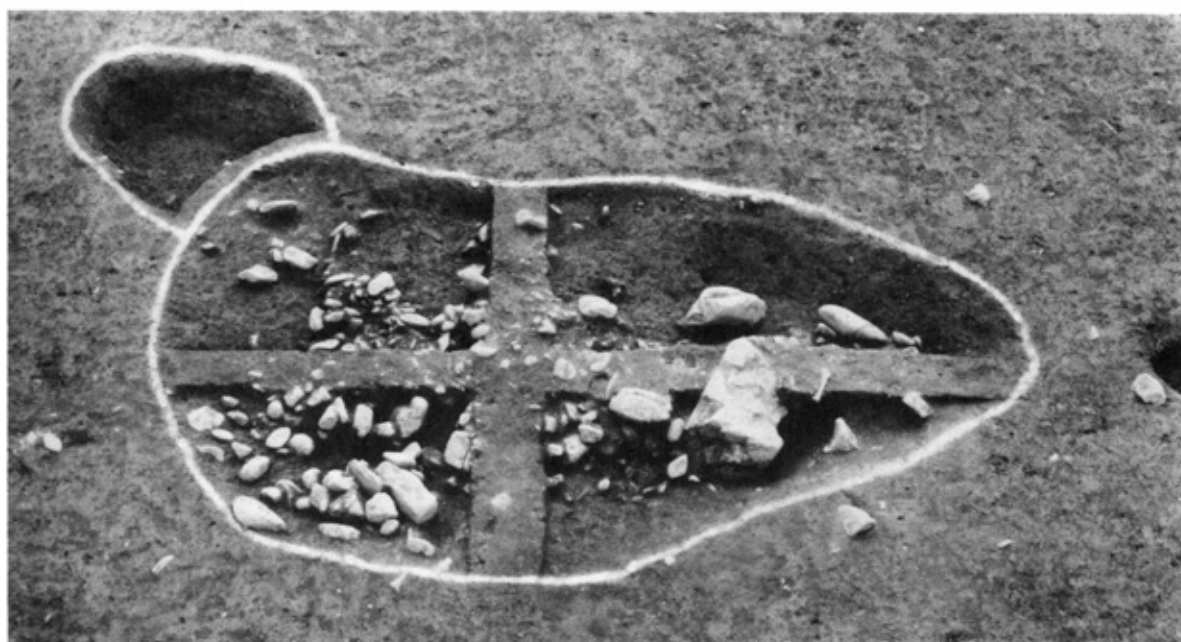


3. SK04・05
(南から)

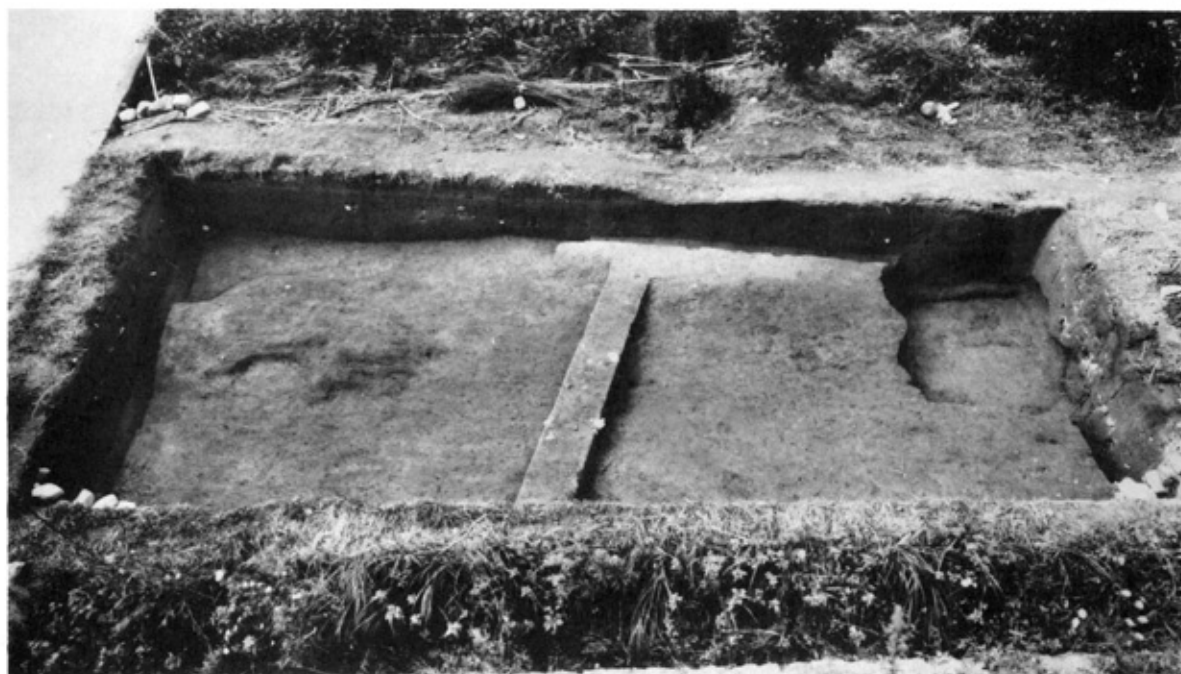
1. B区
縄文時代の
遺構
(南から)



2. 集石1
(北から)



3. E区全景
(東から)

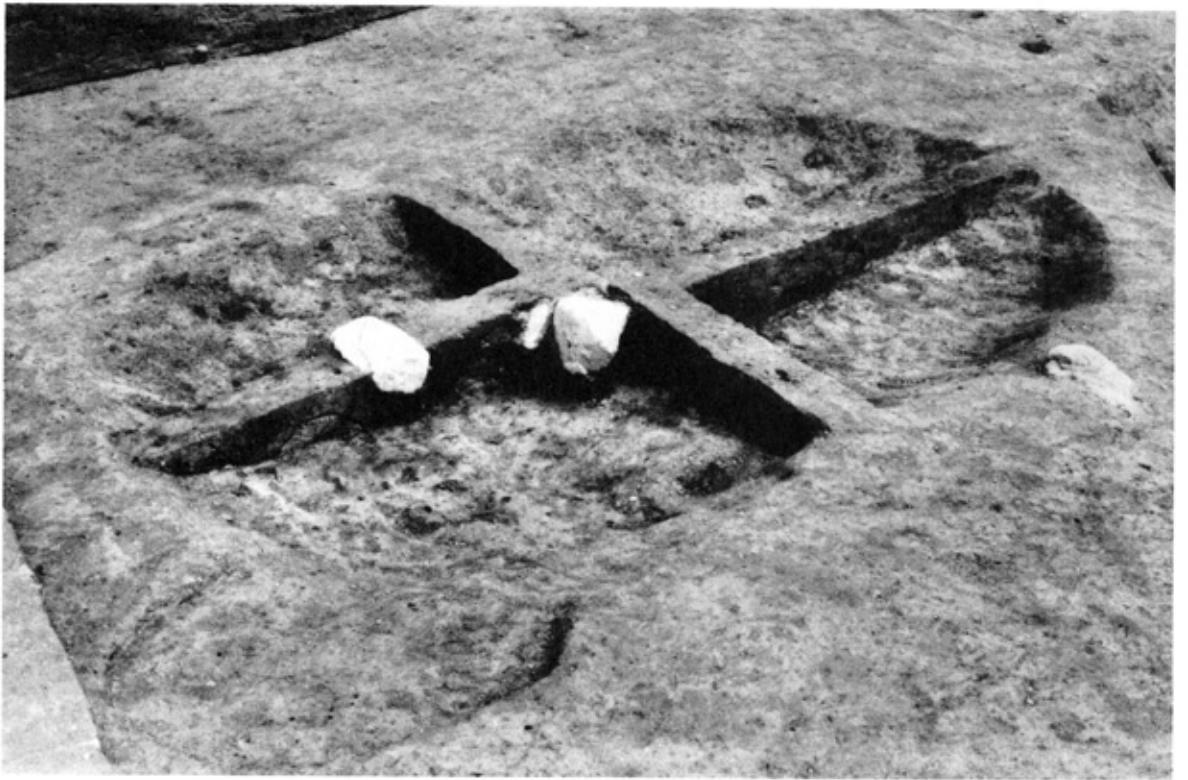




1. F～H区
全景
(北から)



2. F～H区
南半検出
遺構
(北から)



1. SK15
(西から)



2. SX01
(西から)

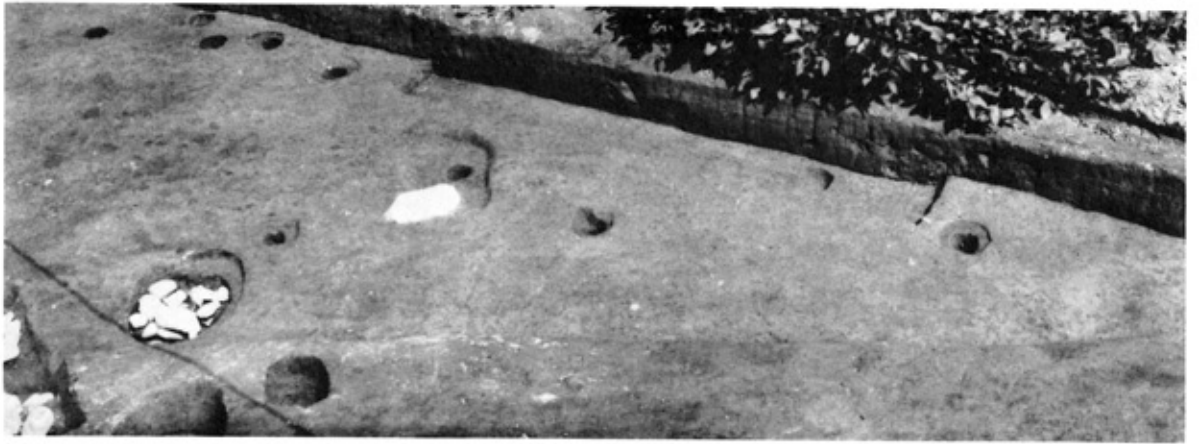


3. SK20
(北西から)

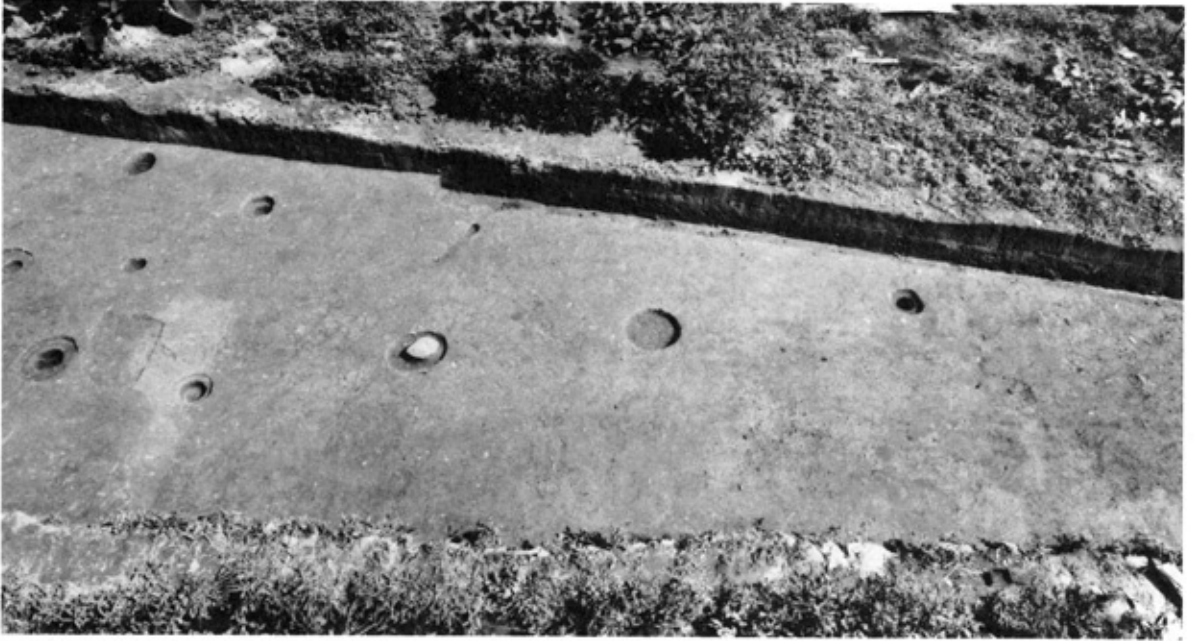


4. SK19
(北西から)

1. SB01
(南西から)



2. SB04
(南西から)



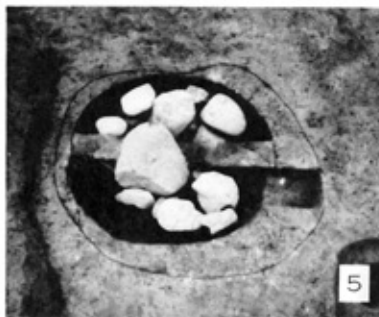
3. SB05
(南西から)



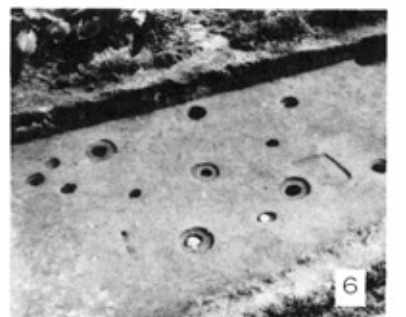
4. SK18
(北東から)



5. SK21
(南から)



6. SB03
(西から)



1. I区全景
(西から)



2. J区全景
(東から)



3. K区全景
(東から)



1. K区全景
(西から)



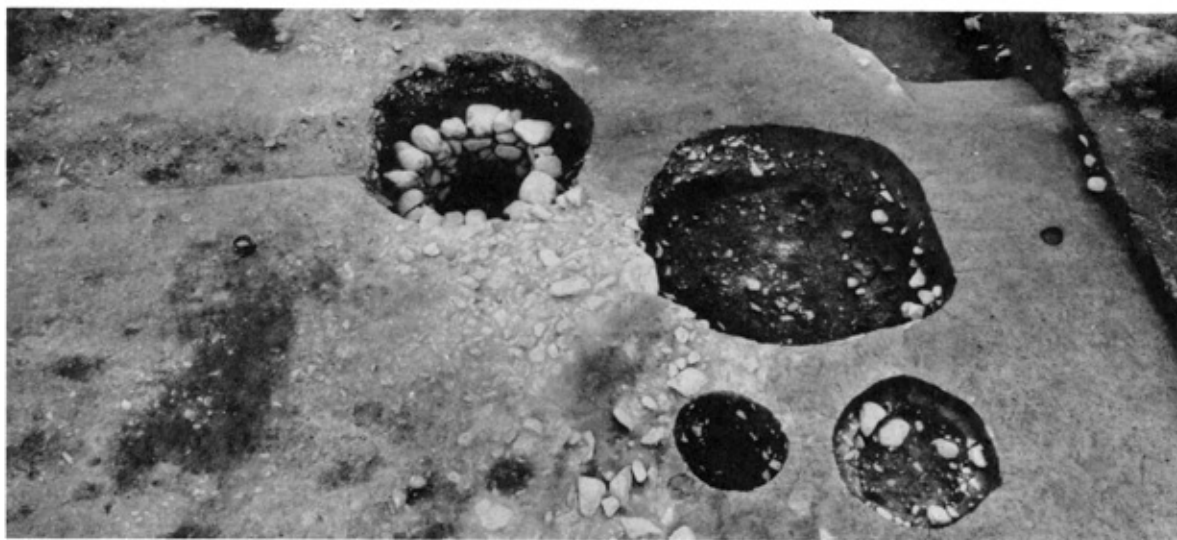
2. L区全景
(西から)



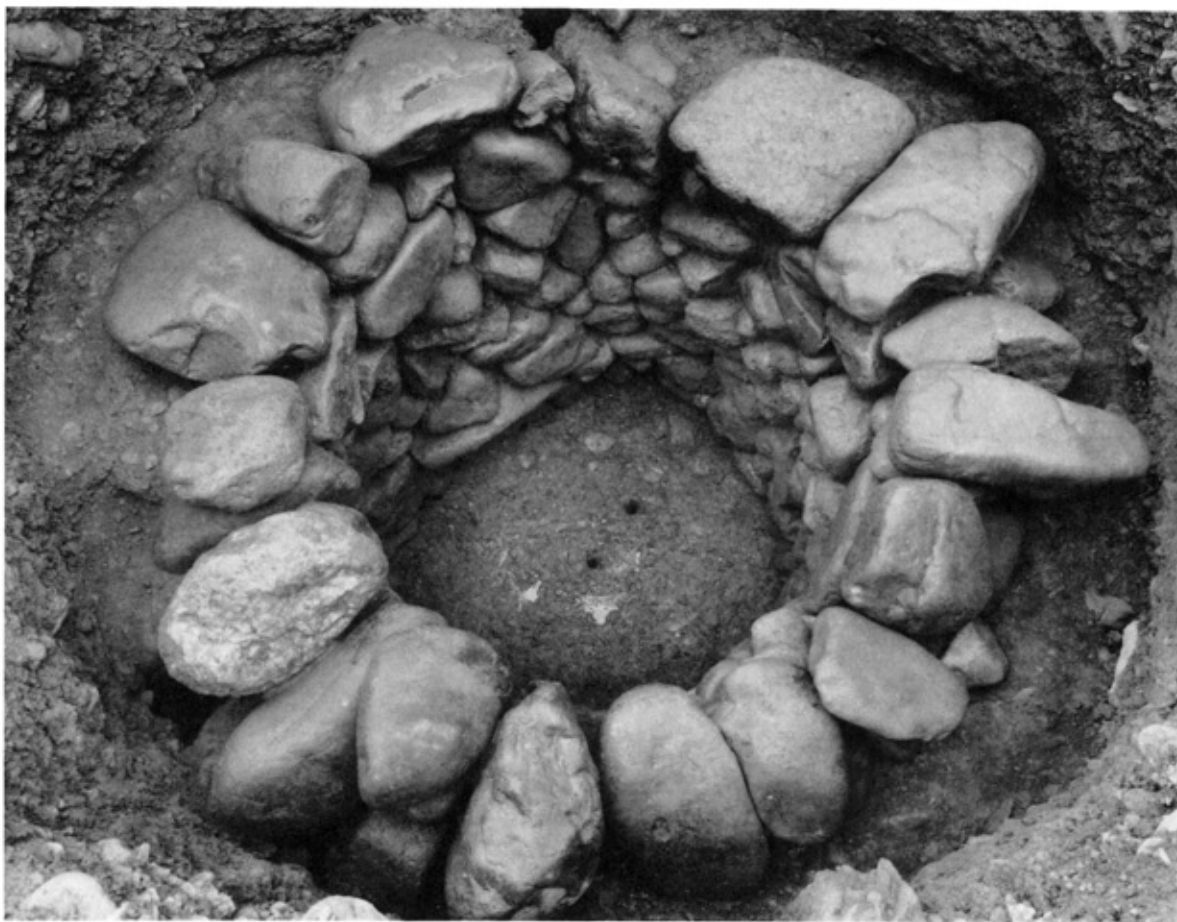
3. M区全景
(西から)



1. SE01
SK47
(西から)



2. SE01
(北から)



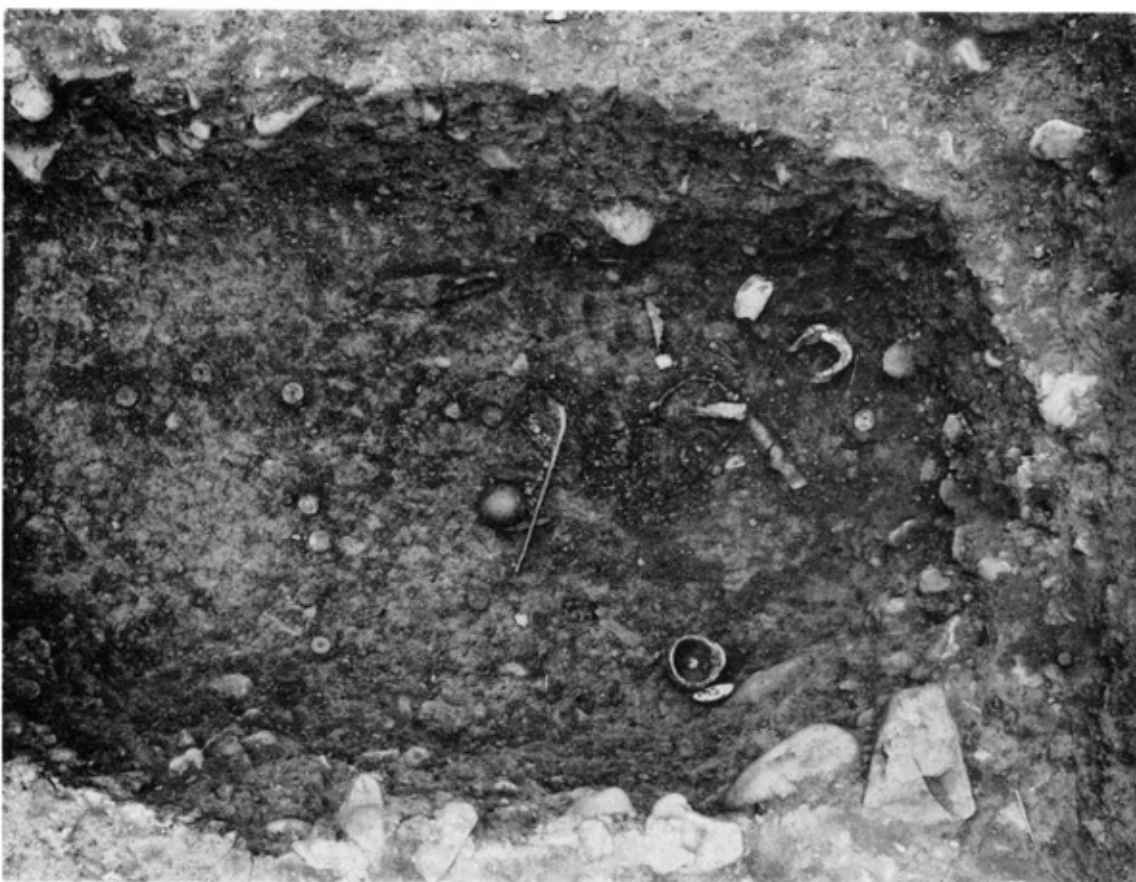
3. SK48
(北から)



1. SX05
(東から)



2. 同
遺物出土
状況
(東から)



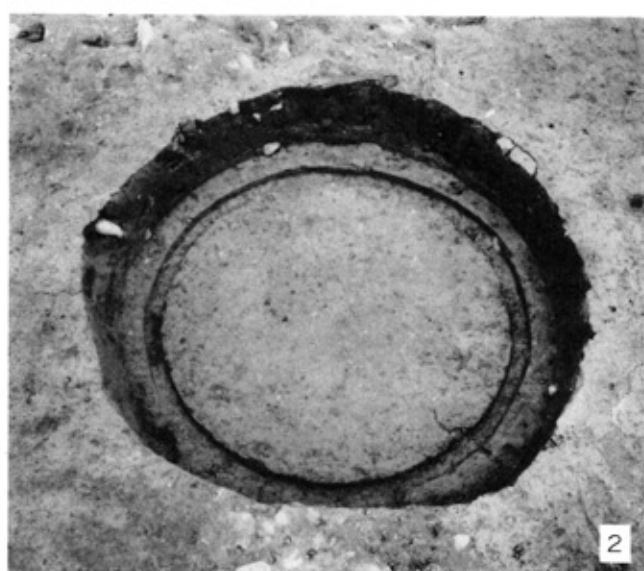
3. SX06
(東から)



1. SK24
(南西から)



2. SK40
(南西から)



3. SK33
(西から)



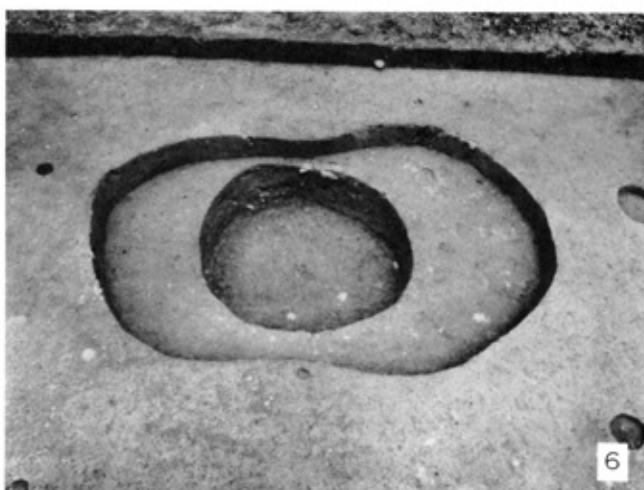
4. SK41・
SK42
(東から)



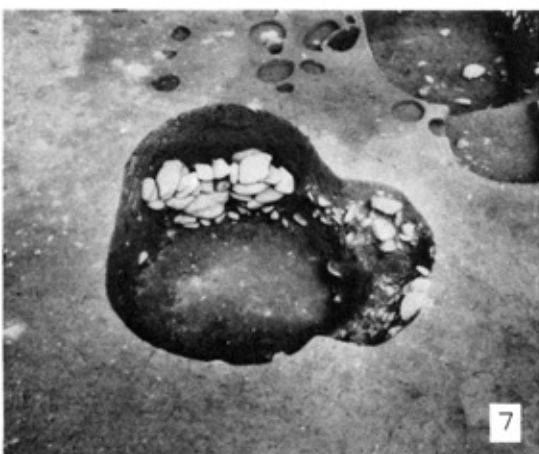
5. SK38
(南西から)



6. SK46
(南から)

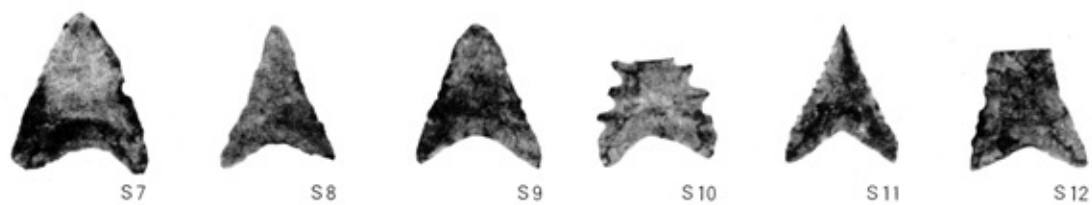


7. SK43
(西から)



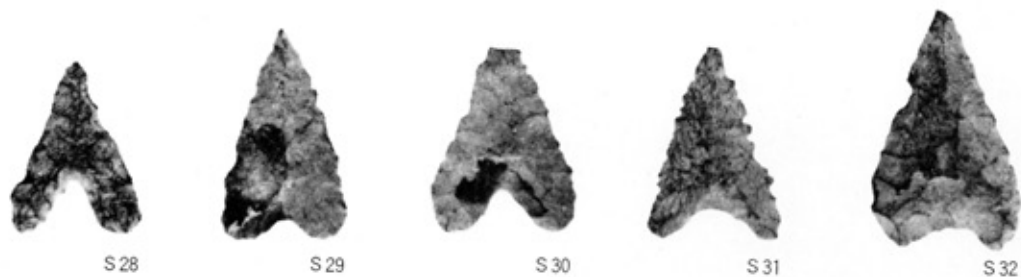
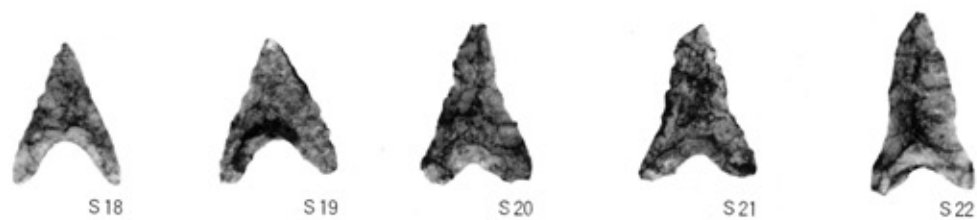
8. SK44
(北から)





石 鏃 (1)

1:1



石 鏃 (2)

1:1



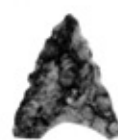
S33



S34



S35



S36



S37



S38



S39



S40



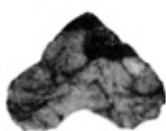
S41



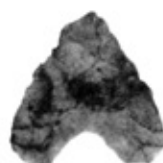
S42



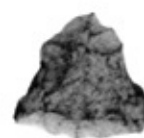
S43



S44



S45



S46



S47

石 鏃 (3)

1:1



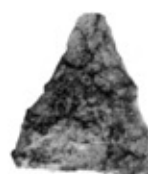
S48



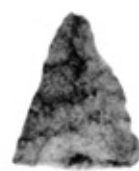
S49



S50



S51



S52



S53



S54



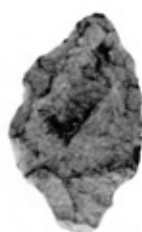
S55



S56



S57



S58



S59



S60



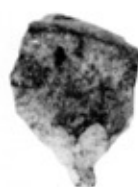
S61



S62

石 鏃 (4)

1:1



S63



S64



S65



S66



S67



S68



S69



S70



S71



S72

石 錐

1:1



S80



S81



S82



S83

楔形石器

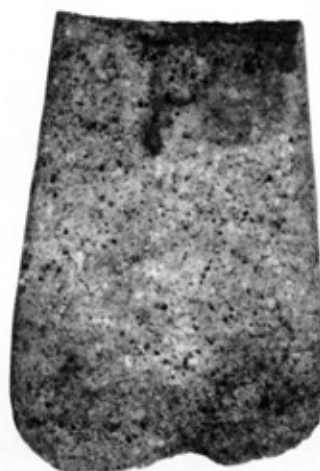
1:1



1:2



S87



2:3



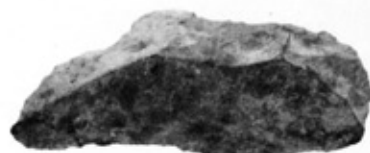
S88

砥 石

石 斧



S73



S74



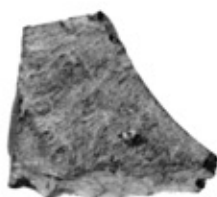
S75



S76



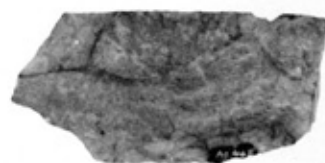
S77



S78



S79

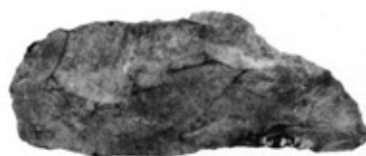


S80

スクレイパー 2:3



S73'



S74'



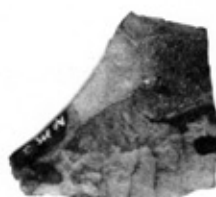
S75'



S76'



S77'



S78'



S79'



S80'

2:3



S84



S85



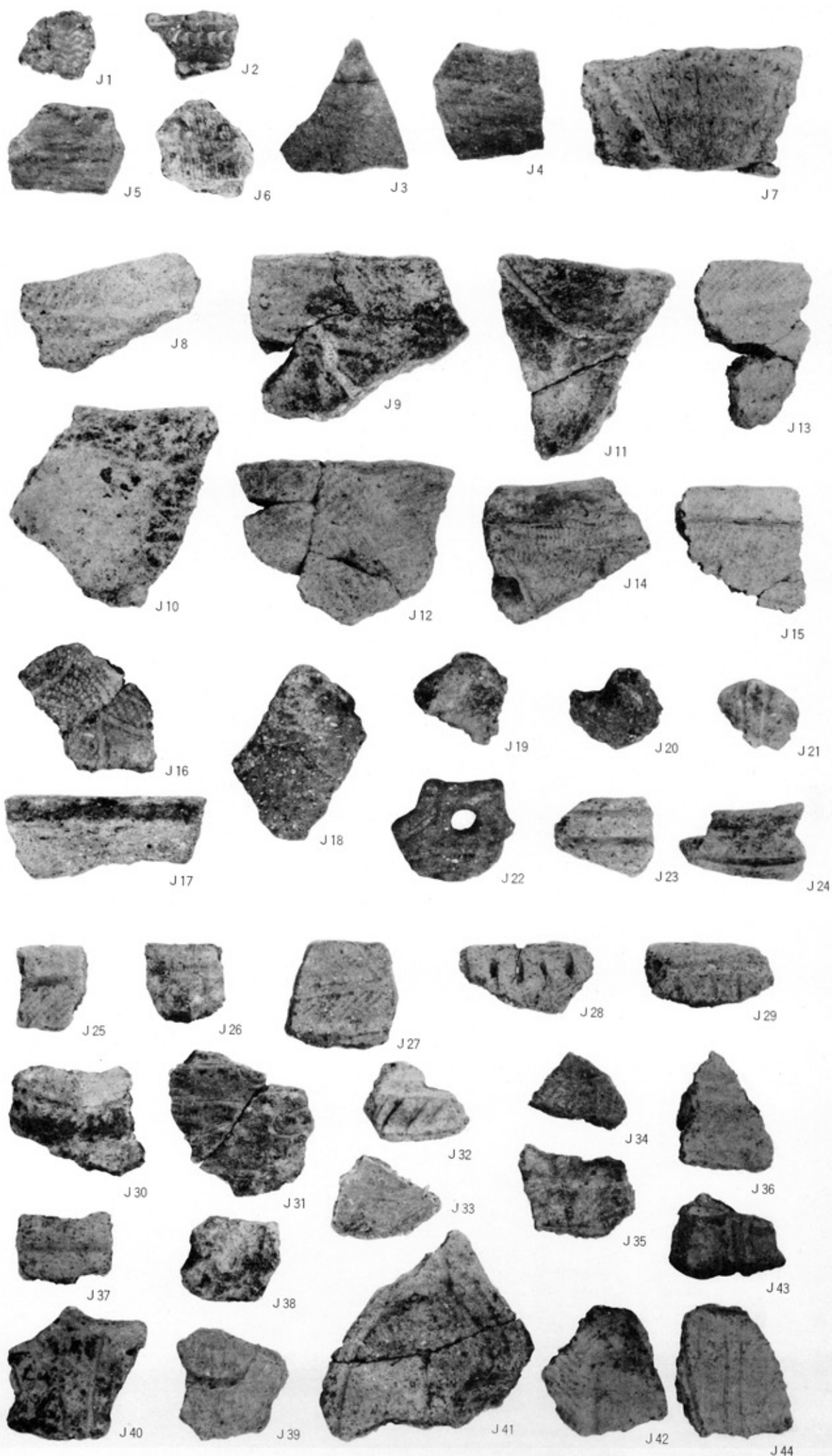
S86

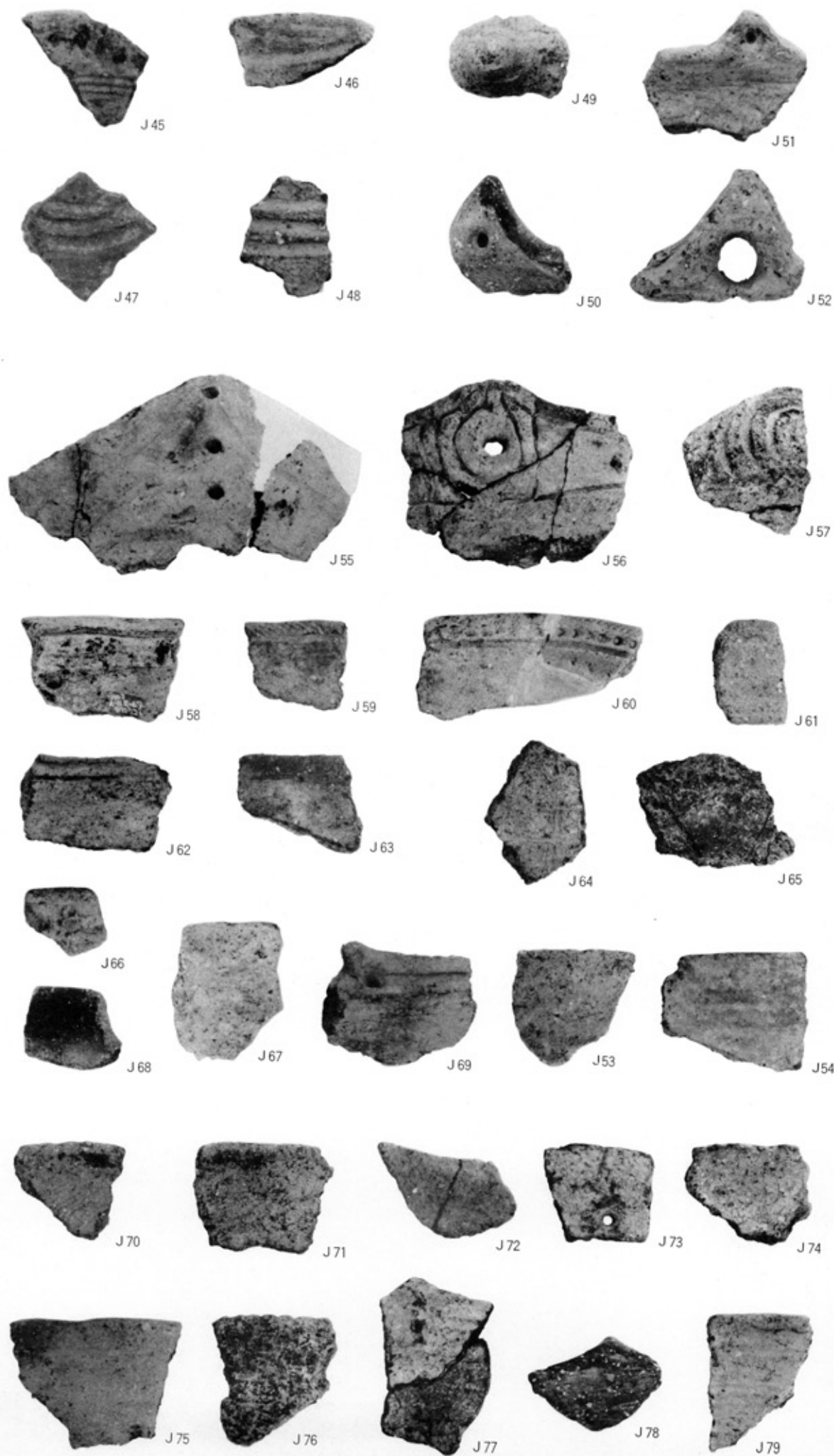
不定形石器

石 錘

1:1

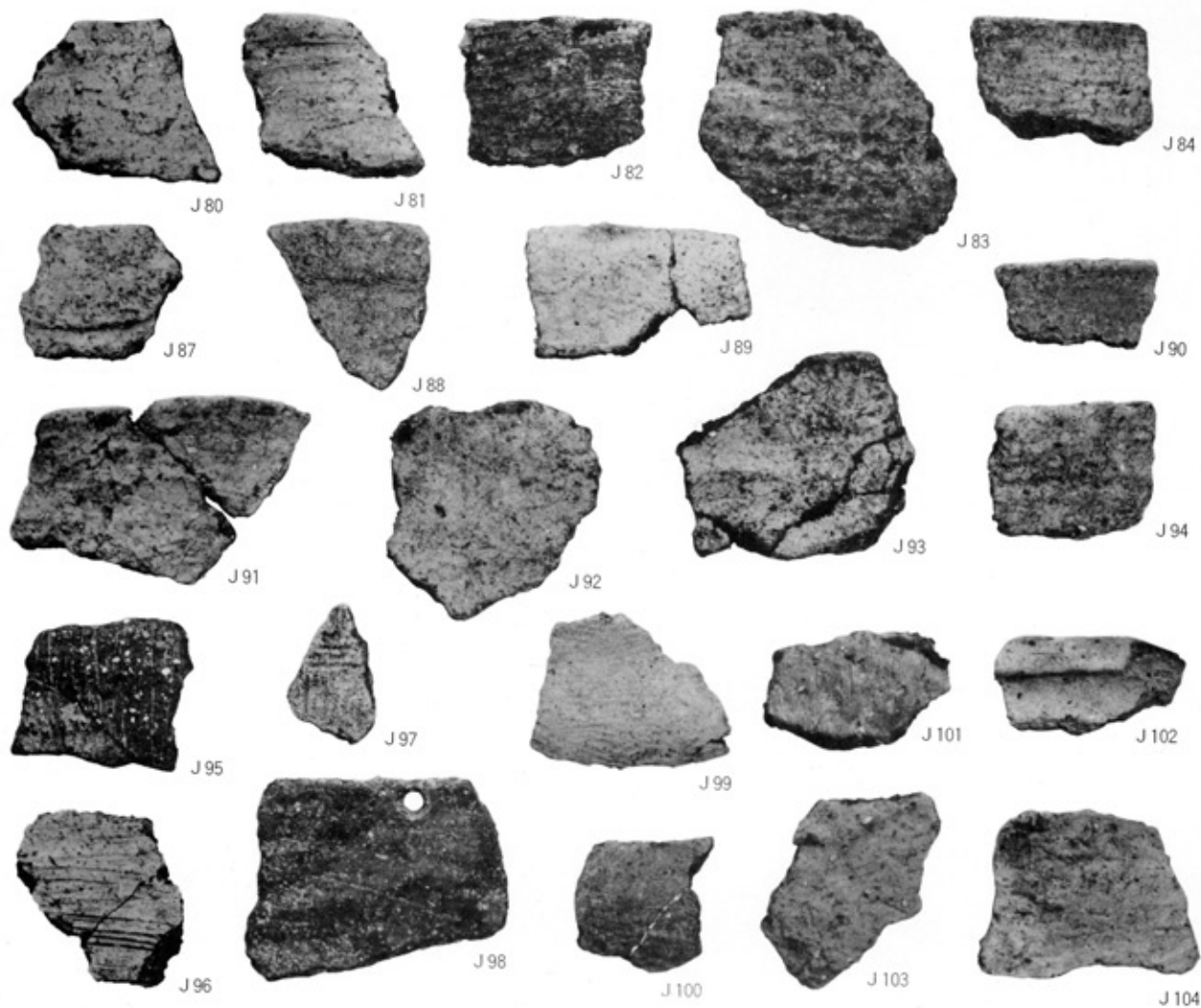
1:2



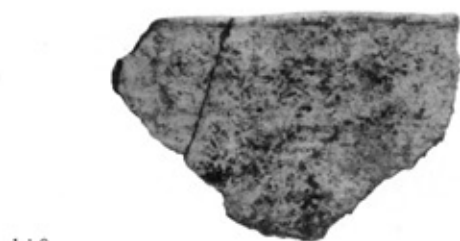


1:2

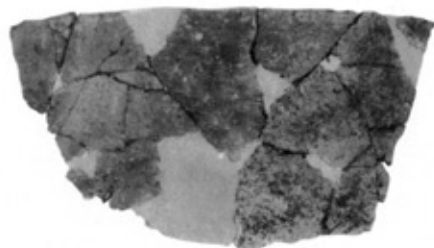
J45~48:任意



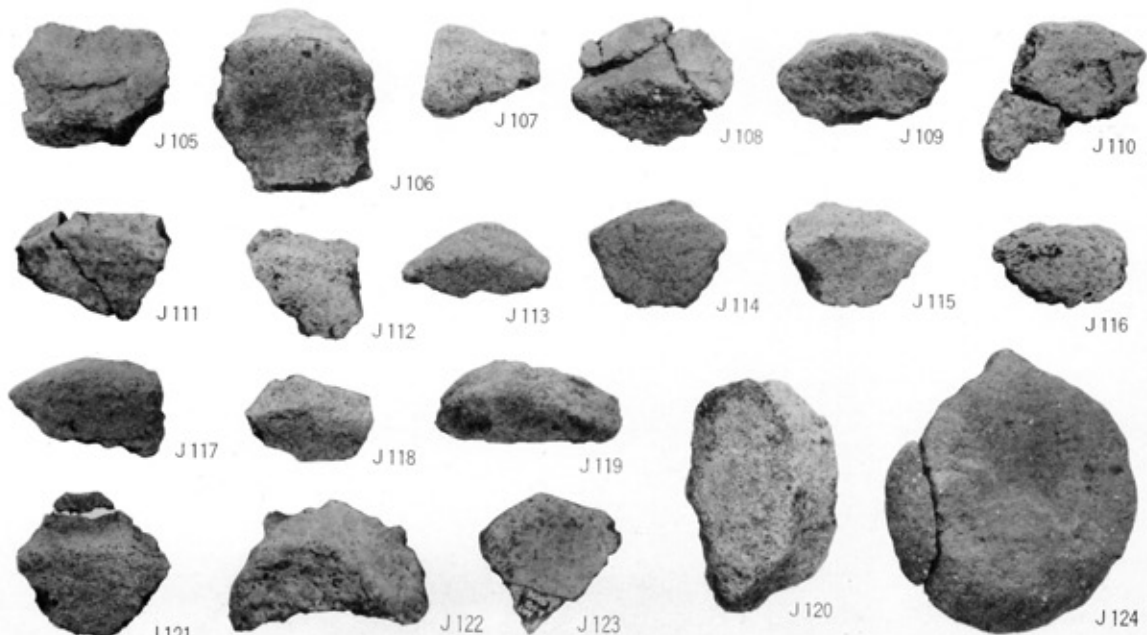
1:2



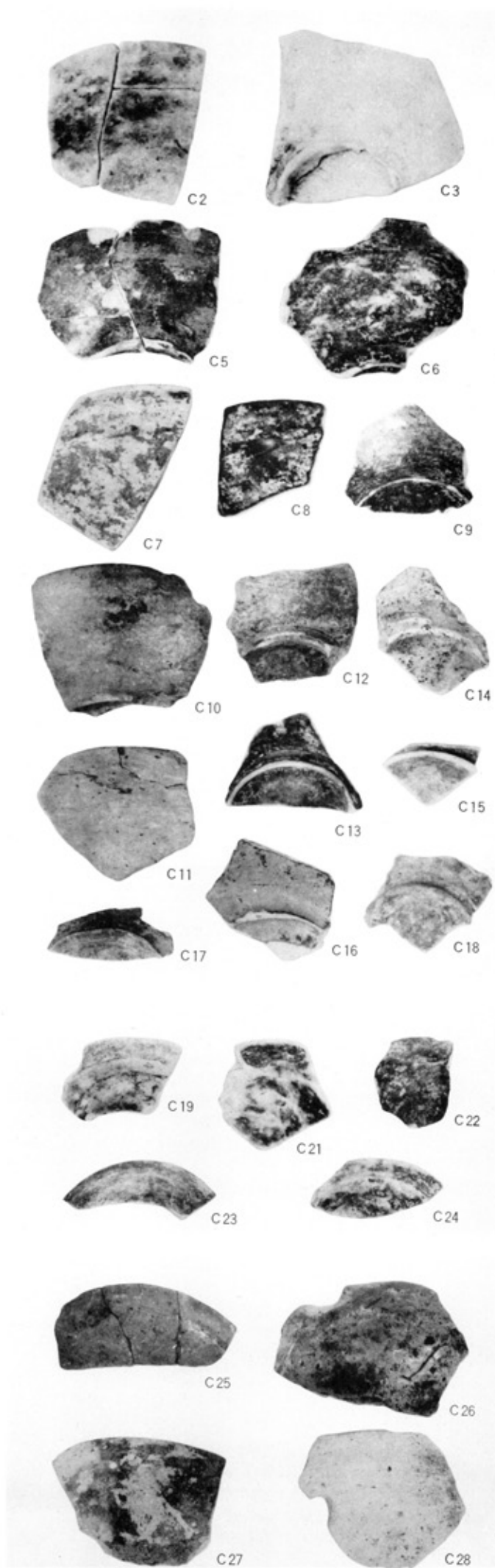
1:2

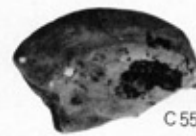
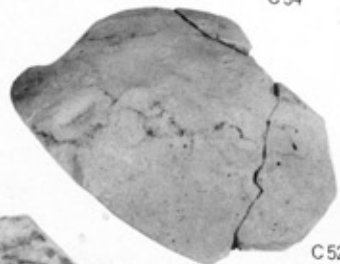
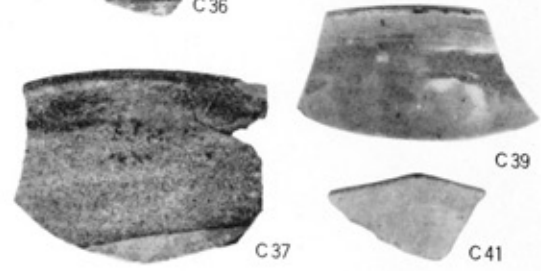
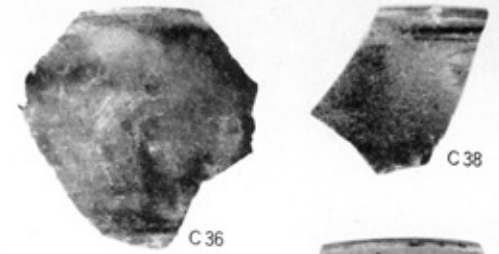
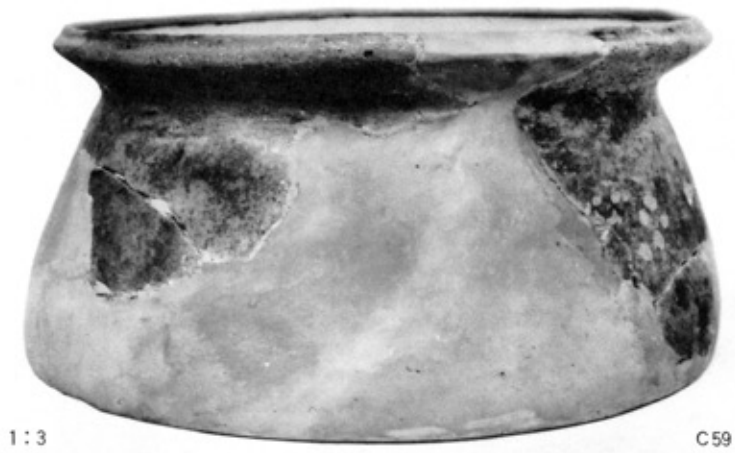
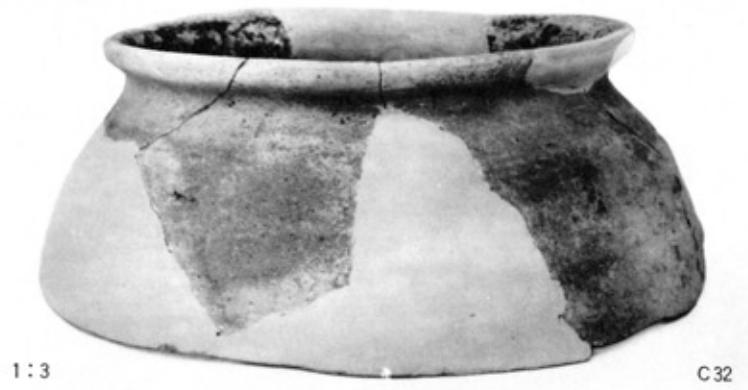


1:4



1:3



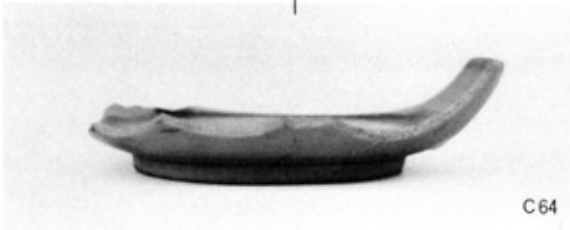
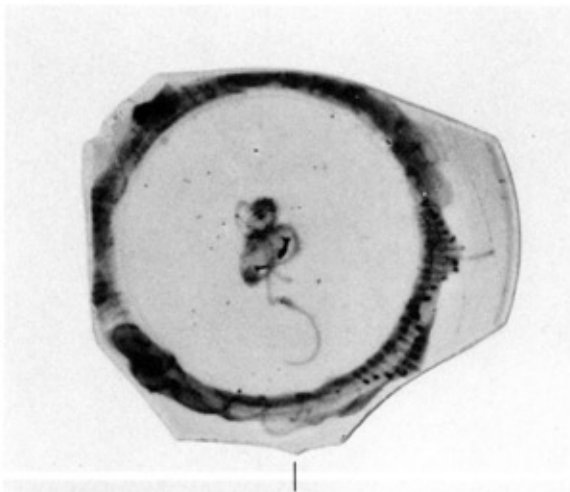




C61



C62



C64

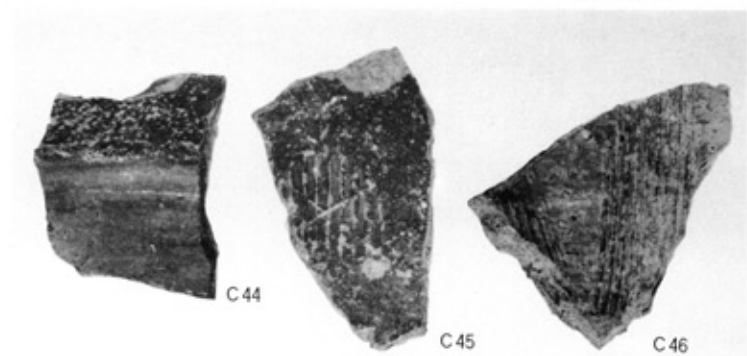


C65



C66

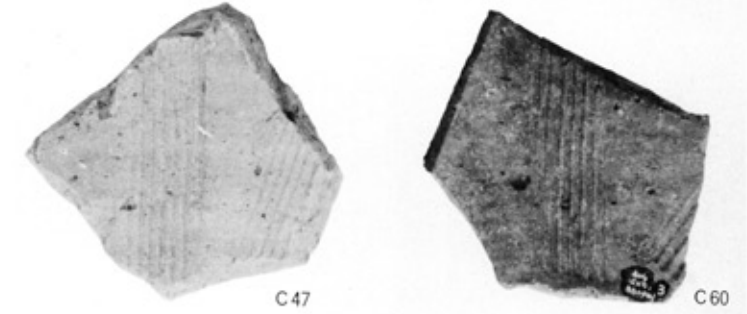
1:2



C44

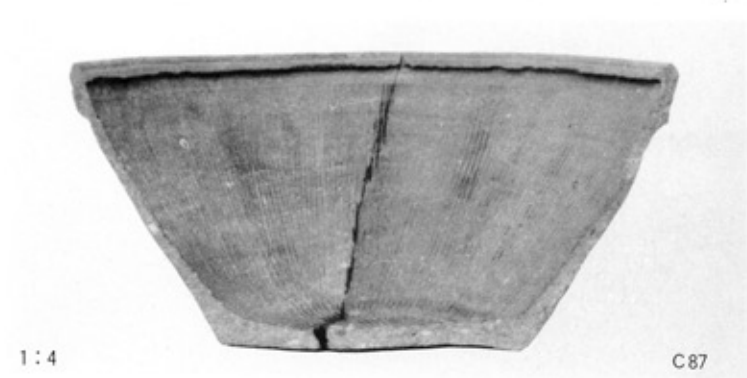
C45

C46



C47

C60



1:4

C87



C88



1:4

C90



C67



C74



C70



C75



C72



C77



C68



C78



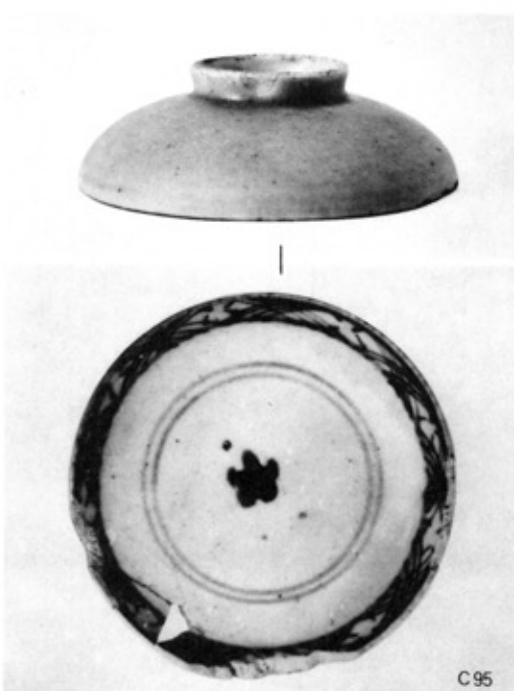
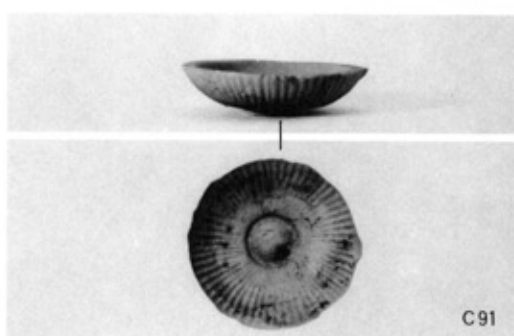
C73



C82



C94



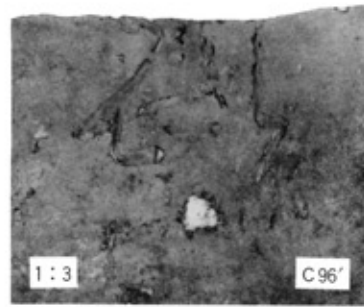
1:2

C85:任意



瓦 1:3

C96



1:3

C96'



1:3

C97



1:2

C98



1:2



1:2

C100



1:2

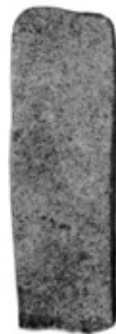
C101

金屬製品



1:3

C104



1:2

1:2



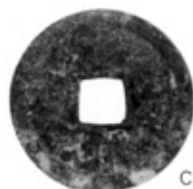
1:2

C102



C103

石製品



C105



C106



C107



C108



C109



C110



C111



C112



C113



C114



C115



C116

錢貨

1:1

あ お
栗生遺跡発掘調査報告書

——県道有田・高野線道路改良工事に伴う発掘調査——

1990年3月

編集・発行 和歌山県文化財センター

印刷 眞 陽 社